

《座談会》

同志社の生きる道

——進学人口の激減期にそなえて——

藤 本 元 (大学工学部教授)

望 田 幸 男 (大学文学部教授)

野 本 真 也 (大学神学部教授)

奥 村 皓 夫 (高等学校教諭)

坂 本 清 音 (女子大学教授)

玉 置 日出夫 (女子大学教授)

——司 会——

前 川 恭 一 (大学商学部教授)

——出席者 (ABC順)——

前川 本日は後期の講義開始日をひかえ、なにかとお忙しいところをお集まりいただきありがとうございます。今回の座談会のテーマは、「同志社の生きる道」ということでございますが、二十一世紀に向けて、これからの同志社いかにあるべきかということを大学、女子大学、中高それぞれの立場からお話をいただければと思っております。

座談会に入る前にすこし考慮していただくべき点を述べさせていただきますと、一つは副題にもございますように、十八歳の進学人口が、あと二、三年は増加しますけれども、一九九二年の二百五万人をピークとして、その後は二〇〇〇年の百五十一万人へと減少し、いわゆる「激減期」に入るという問題がございます。

また、この一年ほどの間に、大学審議会の教育部会とか大学院部会でいろいろ審議されて報告が出ておりますが、この九月一日には大学院設置基準が改定され、文部省令として大学院改革の方向が打ち出されてきております。独立大学院とか、独立研究科とか、学部三年で大学院に進むことができるとか、修士一年で後期に進むことができるとか、夜間大

学院とか、そういった新しい問題が大学院改革の方向として打ち出されてきております。

また教育部会では一般教育の履修義務の廃止とか一般教育と専門教育の区分の解消とか、そういった問題が議論されており、大学設置基準をもっと簡素化して、それぞれの大学で自主的にカリキュラムを組むようにするか、そのかわりに自己評価システムを考えるというような問題が出てきておるようでございます。このような文部省あるいは大学審議会の動きに対して、同志社としては独自にこれらの問題にどのように対処していくかという問題があるかと思えます。

もう一つの問題は、一九八六年に田辺校地が開校されて、ことしで四年目を迎えるわけでございますが、いわゆる二校地体制の問題がございます。「田辺の活性化」ということがよくいわれますけれども、この問題は座談会のなかで、できれば共通の問題として取り上げていただければと思います。それではまず大学のほうからこれまで取り組んできた問題なり、あるいはこれから取り組むべき課題について、ひとつ野本先生のほうからお話しをいただければと思います。

大学の現状・問題点と

取り組むべき課題

野本 大学では、いま前川先生がご指摘なさったような問題について、ずいぶん長い時間をかけて検討を続けてきている経過があるわけでございます。すこしご紹介しておきますと、一九八四年ごろですけれども、木枝学長のときに、同志社が今後直面していくだろうさまざまな問題について検討をしなければいけないということで、中長期教学検討委員会が設置されました。この委員会は一九八四年度、一九八五年度の二年間にわたって検討をしたわけですけれども、その検討が今日に至るまで大きな流れを形づくっているのではないかと思います。

このときにはどんなことが検討されたかと申しますと、今後の中長期的な見通しのなかでの教育体制、研究体制、大学院のあり方、田辺校地の利用に伴って学部の新編成や新設をどうするか、こういったことが検討されました。

具体的な問題はいろいろあるわけですが、でも、この答申の基本というのは三本の柱か

ら成り立っているのではないかと思います。つまり現代社会の動きに対応するために同志社大学ではどのような道を進んでいく必要があるのか、その太い道と申しますか、これからの同志社大学を立ていく柱と申しますか、それについて三本あります。一本は情報化、それから二本目は国際化、三本目は学際化、この三本の道を推進していこうじゃないか、あるいはこれに基づいて考えていったらどうだろうか、ということでの答申は検討されていると思います。

たとえば情報化ということに関して申しますと、教育器材の導入であるとか、情報機器を使った教育方法の開発が必要だとか、情報センターの設置が望まれるとか、図書館の新しいあり方を検討しなければいけないとか、そういった情報に関連する問題点が指摘されています。

それから国際化ということでは、かなり具体的に突っ込んだ提案がなされているのですけれども、海外研修であるとか、留学制度であるとか、外国人教員や留学生の受け入れについてであるとか、国際交流センターを設置するとか、外国語教育のあり方についてとか、



藤本 元氏

そういった国際化を推進していくための具体案が示されています。

それから学際化ということですが、学部や学科などの壁をこえた研究教育の活動交流が今後ますます必要になってくるだろう。具体的には学際科目を設置する必要があるのではない。あるいは学部再編や新設学部の問題を考えていくときにも、このような学際という点で同志社の特色を出していけないだろうか、そういったことが検討されて、このような柱に添った形で将来考えていくことがないか、こういうことが基本線となっているように思います。と申しますのは、当時学内には、新設学部を早く実現せよとかいろいろな声があったわけで、そうしたことを全学的に考えていくその出発点にこの答申がな

っているのではないかと思います。

そこで、一九八六年度、原学長の時代になりますと、この答申を受けまして、五つの諮問委員会が設置されました。その五つは、情報化時代に対応する教学体制強化についての具体的方針を出す委員会、それから国際交流についての委員会、外国語教育の充実のための具体的方策の委員会、学際科目の設置と運営の具体的方策についての委員会、キリスト教主義教育についての委員会でした。

これらの答申は、一年間で検討していただいて各委員会から出されたのですけれども、原学長時代にはさらに、そのあと一九八七年度と八八年度にこれらの答申をふまえたうえで、教学体制検討委員会と大学院教学体制専門部会と事務改善検討委員会、この三つの諮問委員会が設置されました。一九八九年、この三月に答申が出されたわけです。

このなかでとくに重要なのは教学体制検討委員会でごいまして、問題点がずいぶん絞り込まれており、工学部移転統合問題、それから責任体制の問題、これは田辺と今出川の両校地の責任体制ですが、それから学部学科の再編と新設の必要性、大学院の整備充実の

問題、研究所、センターのあり方、こういった大学として非常に重要な問題点が指摘されたわけです。ただ具体的な提案にまでは至りませんで、問題点の指摘ということに重点が置かれたわけです。

ことしの四月に笹田学長が就任なさいますから、ここで指摘されている重要な問題、こんどはどのように具体的に実現するかということ、問題点はよくわかったから、これらの問題点を解決していかなければいけない。そのために具体的にはどうしたらいいかということ、学長は具体的な実施案の検討のために三つの委員会を設置されました。一つは工学部統合計画に関する委員会、二つ目は両校地の責任体制に関する委員会、三つ目は教学の将来計画に関する委員会、とくにこれは大学院の充実ということがポイントですが、けれども、これら三つの委員会が設置されまして、現在各委員会で精力的にそれぞれの問題について検討がなされている、そういう段階でございます。

その中身は追々とお話ししていくことにいたしまして、方向としては最初に申しましたように情報化・国際化・学際化という三つの



望田 幸男氏

線のつとつたうえで、どうしても同志社が具体的にこれらの問題を解決していかねければいけないという、非常に具体的などころに現在差ししかかっていると思います。

女子大学の現状・問題と 取り組むべき課題

前川 野本先生から、これまで大学が取り組んできたいくつかの課題について、その経過を明らかにしていただき、現在直面している主要な問題をご報告いただいたわけですが、女子大学はこの間に短期学部を新設するとか、日本語日本文学科を設立するなど、かなり思いきった取り組みをなさってきておられます。そこで、玉置先生のほうから女子大学のこれまでの取り組み、現在直面している

問題など、お話をさせていただければと思います。

玉置 女子大学におきましては、十八歳の進学人口の急減期に対する対策と田辺校地の利用とが密接に関連しておりますので、まず田辺校地の利用についてお話をさせていただきます。

田辺校地の利用は一九八六年から実質的に行われましたが、田辺校地の利用については二十年程前から問題になっておりました。と申しますのは、当時女子大学は学芸学部の一学部でありましたが、英文学科と家政学科に大学院設置の機運が高まりました。しかし、家政学科のままでは大学院の設置は出来ませんので、家政学部を新設しなければならなくなりました。それが一九六七年のことで、家政学部の設置認可がおりたわけでございますが、その時文部省から、「中心校地が狭隘なので——中略——同校地におけるいずれかの学校または大学の教養課程もしくは専門課程の移転等適当な方法を速やかに考慮すること」という認可条件がついておりました。したがって、この時点から田辺校地の利用が女子大学のなかでいろいろ討議され、田辺校地に関

する委員会が数度にわたって設けられました。そして初めの頃の委員会でも、田辺校地に短期大学を新設したらという答申もされておりましたが、結局その時には目の目を見ずに一九八六年に短期大学の英米語科と日本語日本文学科が田辺校地に設置されました。

また音楽学科は今出川の校舎が非常に狭隘であるということから田辺校地に移転し、同時に二十五名から一挙に百名（内五十名は臨時定員）の定員増を行いました。その後一九八八年には英文学科が五十名、家政学科と食物学科の食物学専攻にそれぞれ二十名ずつの臨時定員増を致しました。そして一九八九年には学芸学部日本語日本文学科、これは定員百二十名でございますが、それを新設致しました。したがって短期大学の英米語科が二百名、日本語日本文学科が二百名でございますので、これらが完成年度になりますと約二千名の定員増となります。

従来の女子大学は、相当定員をオーバーして学生数が三千名ぐらいのときがあったわけでございますが、亡くなられた上野総長がおっしゃったのには、やはり私立学校としては五千名の規模でないと財政的にはやっていけ



野本 真也氏

ないと、いったようなことを言っておられまして、こんどの定員増でいたいその線に近ずいたのではないかと考えられます。

ところで、そのような学生数を集めるためには教育内容の充実ということはもちろんのことですけれども、いかにして多くの優秀な志願者を集めるかということが重要ではないかと思われまふ。それにはやはり入学試験の方法が非常に大きな影響をもっております。

一九八三年度までは一類、二類という二回の入学試験の方法をとっておりました。一類と申しますのはどちらかといえば公募制の推薦によく似ていたわけですが、その定着率が非常に悪くなってきました。それでこの一類の意味が薄れてきたわけでございます。そこで一九八四年度から推薦入学制度を取り入れま

して、そして一般入試を一回にしたわけでございます。

この推薦入試には、やはり多様な学生を受け入れたいということからA項、B項、C項と言う三種の推薦方法を取りました。A項と申しますのはキリスト教学校教育同盟の加盟校からクリスチャンの生徒を推薦していただくと言うことです。これは若干名ですが、昨年ですと短期大学部を含めますと十八名が入学しております。それからB項と申しますのは、一定の基準を設けて指定した高等学校から推薦をしていただくいわゆる指定校制です。これにつきましては志願者数、合格者数および入学者数の多い高等学校に推薦をお願いする方法です。従来は英文学科が三十五名、家政学部が二十五名ということで、定員の約一割だったのですが、一九八九年度の入試より定員の二割をこのB項で推薦していただくことと、指定校を選定する方法を少し替え、近畿圏だけでなしに中国、四国、九州、中部の各地方の高等学校にもお願いする方法を取ることになりました。それからもう一つはC項と申しまして、これは校友同窓の子女を対象にしたものです。当初は定員の5%というこ

とで、抽選で合格者を決める方法をとっておりますが、一九八八年度から一科目の基礎学力試験を行うこととし、定員の二割の人数を合格させることにしました。

したがって推薦入学者の数はA項が若干名、B項が二割、C項が一割それに社内校からの推薦がございますので、全体で三割強すなわち入学者の三人に一人は推薦で入ってきた学生ということになります。この推薦入試では、早い時期に熱意のある学生を確実に確保できる点で、各大学においても推薦制度を大幅に取り入れているところが多いようです。

それから短期大学部の将来について少し話させていただきます。短期大学部は先ほど申し上げましたように相当前にも設置の答申が出たわけでございます。ただあの場合には家政系の学科も入っております。ところが最近、文系あるいは家政系から経済とか法科あるいは理系へ、いわゆる実学志向と申しますか、そういう一つの流れがございます。それともう一つは大学志向と申しますか短期大学から大学へ、こういった二つの大きな流れが女子受験生の志願動向にあらわれており



奥村 皓夫氏

ます。

そのようなことから短大を大学に昇格させるという傾向がとくに関東のほうで強うございます。東京女子大学が短期大学部を現代文学部部に昨年昇格させたわけでございますが、それが受験生にうけて大幅な志願者増を示したということがございます。また来年度から東京キリスト教短期大学とか、あるいは聖徳学園短期大学とか、名古屋造形芸術短期大学といったところが四年制の大学に格上げをすることになっております。そのほか学習院女子短期大学、青山学院女子短期大学、これも共学大学とは別に女子大学への昇格を考えているということでございます。同志社には共学の大学と女子大学が共存しておりますので、そのようなことから様子を聞きに来ら

れているようです。

しかし、本学の短期大学部は設立後三年たったわけでございますけれども、受験者数は開設初年度から予想を大幅に上回る志願者がありました。また年々増加傾向にあります。とくに日本語日本文学科での増加の率が高うございます。

それからまた短期大学は、いわゆる地域性が非常に強いというふうにいわれておりますが、本学の場合には学部と同じようにだいたいの全国の各都道府県から志願者がございます。また受験雑誌の難易度ランキングでは、本学の短期大学部の場合トップクラスでございます。また就職においては学部よりも、いわゆる大企業といえますか、あるいは優良企業、そういうところに就職する率が非常に高いようでございます。これは本学がキリスト教主義による円満な人格形成を図ってきたということと、やはり百十三年の歴史と伝統によって優秀な学生を社会に出してきた、そういうことが大企業とかあるいは優良企業から高く評価されている結果だというふうに考えられております。

ところで、ことしの女子の進学率、これは

八月三日に文部省がことしの学校基本調査から発表したわけですが、女子の進学率が三六・八%、男子が三五・八%ですから一%こえた、いわゆる女性優位になったということが新聞に出ておりました。

過去のいろんな統計から見しても、女子の短期大学の進学者の伸び率は大学のそれと比べると減少したというふうにいわれております。実際の人数からいいますと女子の進学率がふえておりますので、短期大学の進学者の数はすこしも減っていないわけです。だいたい大学の志願者の二倍あります。それからまた実学志向ということで専修学校あるいは専門学校にも行っているわけですが、そういった志願者の二倍、ですから女子の進学者の半分が短大志向であると、考えられます。

それから本学における短期大学と学部の併願率、日本語日本文化学科の場合はまだその志願動向ははっきりいたしませんけれども、英米語科と英文学科の併願率を見ても、と、だいたい二〇から二五%ということですね。すなわち短期大学も受けて大学も受けるという率です。ですからあとの、いわゆる短大受験者のうちの七五%から八〇%は短期大学志



坂本 清音氏

向であることから短期大学志向の志願者というものも多く、今後もそれほど大きな変化はないだろうということが考えられます。

それともう一つは学費がもう百万円を超しかけていくわけで、そういった高学費化によって、短期大学の二年間で終えてという、率も相当多いようでございます。このようなことから短期大学の将来というのはある程度樂觀してもいいのではないかと私は考えております。

前川 お二人の先生から大学、女子大学のこれまでの取り組みについて、いわば総論的にお話をしていただき、各種委員会の紹介などもしていただいたわけですが、もうすこし各論に入って問題別に議論をしていただければと思います。とくに教育の現場、あるいは

研究室から見て、先ほどのお話とのかかわりでご発言をいただければと思います。ことに大学では工学部の統合計画問題が最大の課題になっていると思いますが、藤本先生のほうから工学部サイドからの言い分も含めて、ひとつ工学部の問題を中心にご発言いただければと思うのですが。

工学部の統合計画問題

藤本 私は同志社にまいりましてわずかでございますが、先代の先生に非常にお世話になりました。かれこれ二十年近く前にこの先生から同志社が田辺に工学部用地を用意したとうかがっております。ところが、六年前にまいりましたら、まだそんな話はよその国の出来事じゃないかというような印象を受けたのですが、漸く今年の四月に、いまご質問ございました工学部の統合計画というような委員会も発足しております。

工学部側から見ますと、まず一点目は非常に狭いということでございます。仮にの例ですが、たとえば私の研究室には、私を含めて大学院の学生八人が同居して仕事をやって

おります。実験室も狭く、例えば文部省と大学の補助による研究設備や研究装置を入れようにも、現状ではスペースの余裕がありません。またこれ以上大学院を拡充するといつても実験室が狭いということもありません。あるいは音の問題、においの問題、排水の問題等解決すべき点がいろいろございます。私が出ました大学では昭和三十年代の前半に工学部が統合しようということになりまして、実際に動いたのは四十八年なんです。現状維持で移っております。その後三、四年前から大学院大学をつくる動きが出て実際に発足しておりますが、この間工学部同窓会で五十億円の寄付を集めたようです。我々工学部も、同志社全体の財政を見た場合に、現状維持の移転統合もやむをえないかなあということとは、私個人では思っております。

二点目は、問題点としては一番大きいのですが、教員側のタイムロスが非常に大きいというところでございます。たとえば一講時目の講義をやっても、実際に今出川に戻れるのは午後の三講時になります。そういたしますとその間の時間が全部ロスになるわけでございますね。これが一つ重要なポイントだと思



玉置 日出夫氏

います。

三、四目は、すでに各学科で専門教育を二回生以下に下ろしております。ところがそういう実験や専門教育にしても、教員が急いで今出川に戻らないといけませんから、一、二回生の諸君は講義時間外に質問ができません。専門課程の今出川はどうなんだろうということは、三回生以上になって初めてわかるわけでしょう。四回生以上になりますと、だいたいどのゼミも夏休み、春休み、冬休みを含めて毎日遅くまで活動しておりますので、ああ、これはたいへん忙しいんだということもわかりますし、あるいは教員の所に行って気軽に聞ける、質問なんかも受け答えできるという状況が出るんですが、現状ではそれはまったく不可能に近いということです。

す。

また四、五目としては、先代の先生のゼミと私の仕事の関係が非常に深かったものですが、かなり定期的に訪問し、先生のゼミの内容をよく知っております。当然大学院の学生はたくさんいるんだろうなと思って着任いたしましたところ、当時機械工学専攻では一学年だいたい十四、五名でございました。これには私は非常にびっくりいたしました。いまま少機械系が大学院の学生をふやしたいという意向で、文部省定員を無視した形ですが、一学年五十名以上という数字になっております。ところがこれ以上人数をふやそうといえますと、ちよつともう限度かなということになります。工学部に限った問題かもしれませんが、大学院の卒業生に対する社会の要請はきわめて高い。この二十年間ですでに大学院出身者の実績は出ており、評価も定まっております。というのが私の見方でございます。我々同志社が今あるのは、いままで社会に出られたOBの方々の血のにじむような努力の結果だと思っております。工学部のわずか四十年の歴史のなかで各分野で卒業生が非常に活躍されております。それに報いるためにも、また我々

が、オール同志社として生き抜くための一助としても、工学部の大学院の充実はやらざるをえないということが工学部の大きな要求でございます。

もちろん今出川は便利でございますから、たとえば京大にも十分ぐらいで行けます。その点、デメリットもございますけれども、やはり田辺の活性化にも私はつながると思いますので、工学部の統合が実現するといいたく思っております。

前川 工学部の直面している深刻な状況について、また工学部の統合について、率直なご意見を承わったわけですが、このような問題は多かれ少なかれ他の学部でも見られるわけで、横割り移転の問題をあらためて検討しなおります時期にきているのかもしれない。女子大学の場合は、現在四回生がまだこちらにいますけれども、学芸学部は縦割りですべて田辺に行くということになっておりますので、ちよつと事情が違ふわけですね。そこで、田辺の問題も出ましたけれども、三人の先生のこれまでのご発言をうけて望田先生からひとつご意見を承ればと思いますが。



前川 恭一氏

諸問題を全体のものにしていく努力

望田 田辺のことですと、一教員として、

先ほど藤本先生がおっしゃったのとかなり似たようないろんなことを感じているのですが、そういう個別的なことはまたあとで発言するチャンスもあるかと思うので、先ほど野本さんが、ここ数年の大学レベルでの基本的な問題の推移を整理してくださったと思うのですけれども、それに関連して一言……。

野本さんはきれいに整理してくださったわけだけれども、実際はそれほど整合的に展開してきたわけじゃないと思いますけれども、しかし大筋はたしかにばくもそうだと思うのですね。ただそこで問題は、この間に役職に

ついておられた方とか、あるいは各種委員会に何度も参加されている方とか、そういう方の頭脳のなかではたしかに野本さんのおっしゃったように大局的な方針が出、それがいわば三段階的に展開してきたというふうに頭脳のなかでは整合化しようと思うんです。だからそれ自体はとやかく言うつもりはなく、むしろそうだろうと思うのですね。ただ問題は、そういうことが職場レベルのほうでは、全然そういう形では受け取られないということですね。比喩的にいえば有終館レベルでの議論の集積と、職場レベルでの議論の集積との間にギャップがあるということですね。

たとえば先ほどおっしゃったなかでいちばんもとになったのは八四、五年の中期答申だと思うのですけれども、あれがだいたい網羅的に論点は押さえている。個々の点について賛否はあるでしょうけれども押さえているとおもうのですが、あれでも、たとえば文学部教授会レベルでみますと正面から議論されたとすることは一度もないわけですね。ところが有終館レベルでは具体的な形で一定の展開が進むという、そういうところからくるずれの問題があると思います。

ばく自身、それはいいでしょうしたらいいのだということはわかりませんが、おそらく、いまの学長なり、しかるべき執行部がなにかの具体的提案をしたときに、それを有終館レベルでは一つの整合的な発展と考えても、職場レベルではなにか唐突に感じられ、実際に議論にかけると、いろいろのいさ字から議論が始まってしまうというような、そういうことが起こる可能性があります。そうした問題点がどうしてもついてまわると思うのです。

それからあまり一般的に言ってもしかたがないので、具体的な形で、ほぼ似たような意味ですけれども論点として出しますと、たとえば大学院の問題でも、今日いろんな体制を大きく変更する問題がクローズアップしているわけですけれども、ばくなんかが日常的に院生と接し指導しているなかでぶつかっている問題というのは、たとえば学会発表のための出張費を院生は自弁しなければならぬというふうな問題とか、それから教員の研究室と院生の勉強室が分断されて、そのために院生との日常的な交流というのが断たれているというふうな問題とか、それから院生の、必

ずしも独自とはいいませんけれども、院生を優先したような研究発表雑誌というものが必要だと思うのです。そういうふうにより日常的に個々の教員がぶつかっている教育上の問題点や、大学院のいま直面している大きな再編成のなかでなんらかの形で発展的に解決されていかなければならないと思うのですね。そうでないと、職場レベルからいうと文部省からいわれて編成替えしただけで、自分たちの頭の上を風が吹いているような変化にすぎないと思われまふ。そのところをどうつなぐかという問題があると思いますね。

前川 各種委員会でも議論されている問題が、職場でも話題になり、全体のものにしていくための努力が必要だと思ひますが、もうすこし女子大学からのご発言をいただいで、そのあとで議論を深めていただきたいと思ひますので。坂本先生よろしくお願ひします。

坂本 先ほどの玉置先生からのご説明がありましたように、女子大学はここ数年の間に学生の数においても、学科の面でも、それから校地が二つになったという面でも実に急速に拡大発展しているわけです。そういうなかで、これまでごちんまりしていたがゆえに大

切に守つて来ることのできたものが薄れていくのじゃないかという風な危機感を、自分自身が卒業生でもあるものですから、とても感じています。新しい先生もほんとに優秀な先生がどんどん来てくださり、学問のレベルや業績面では申し分のない先生方で大変心強いのですが、同志社の、しかも、女子部の歴史をあまりご存知ない方がありますし、クリスチャンが望ましいと言ひながらも、クリスチャンで入つてくださる先生は大変少ないわけですね。そういう意味で危機感みたひなものをととても感じます。

とくに自分がそのつなぎの役というか、卒業生として、これまでの卒業生、先輩が守つてきたものを、ぜひともあとにつないでいかなければいけないというふうなことを考えるときに不安になるわけです。もちろん、いまの時代にあつたカリキュラムの変更であるとか、あるいは学科の再編成であるとか、そういうことは特にこの時期には大切であるし、その作業に真剣に取り組んでいかなければいけないんですけれども、そういう時だからこそ一層、伝統をしつかりつないでおくことも大切だと思うのです。基礎が不動であると安

心出来れば、思い切つて新しい試みにどんな挑戦できるわけなのです。特にこれまでよくいわれていることですけれども、同志社の歴史をみると、新島先生の研究をされている方は同志社大学のほうに多くおられ、資料もきちんと整理されているのですが、その中で、女子部の歴史に関しては、ほんの一部しか扱われておらず、女子大学のなかでは資料の収集も出ていないし、そういうものを保存しておくところもないんですね。あとでまた玉置先生から今出川の跡地利用のことでお話があるかと思うのですけれども、いまのところ、ほんとうに何もありません。

だけど、プロジェクト・チームを組んで勉強していますと、同志社大学の歴史と女子部の歴史は、ほんとに違うことがよく分ります。同じように新島先生が校祖であつて、しかも新島先生が女子教育の必要を実感されてできた女子部なんですけれども、その後の経緯を見ていますと、大きく異なつていひます。最も大きいのは、独身の女性宣教師の実態面でのかわり方でないかと私は考えています。これは私の個人的な思ひ入れが大きいのかも知れませんが、その当時、女性がいわ

る女子大学という規律のもとで、女は三界に家なしという、だれかに従属しなければ生きていけない時代だったときに、同じ女性のミッショナリーの人たちが女性も同じように神の前では平等なんだ、自分の足で立つて歩いたらいいんだということを自らの生き様を通して示してくれた、そのときの女性のショックというか日本の女性の喜びというか、それはすごかったと思うのですね。そこが女子部の源で、女子部が創設された意義もそこにあったと思うんですね。女性の人格が始めて認められたと言ったらいいいのでしょうか。

当時、女子教育に対しては男の先生がものすごく燃えてくださって、当時のものを読んでますと、日本にはキリスト教的な女子教育が必要なんだと、男性の先生が日夜眠らず、祈っているという記述があちこちにあつて、とくにその当時キリスト教にめざめた男性教育者が、女子教育に真剣に取り組んでくださったことが強く感じられます。

その後女子専門学校から女子大学に推移していく過程の中で新制大学創設時に目指されたりベラル・アーツ大学としての特色も徐々に薄れて行き、少しでも共学の同志社大学に

近付こうとの試みが、特に私の属する英文学科では可成り長い間あったと思います。同志社大学は兄貴で女子大学は妹なのだから、兄貴のすることを真似ていたらいいというような発言を實際よく耳にしました。

でも、これから学生たちが減っていく時期にどんなふうな大学でなければならぬかということを考えるときに、共学の同志社大学の亜流としての女子大学では存在理由がないと思います。もちろん時代のニーズに合ったカリキュラムを用意していくと同時に、同志社大学とは違うアイデンティティを持った大学として女子大学が存続しつつ相互に利用できる単位の互換をしていくことが——これは以前から度々言われていますが——望ましいと思っています。

アメリカでも一九六〇〜七〇年代にかけて女子大学の共学化が進んでいく中で、女子大学のままでいることを選んだ大学（全女子大学の約四分の一）の一つに、ウェルズリー大学があります。その学長が女子大学の女子学生は“equal opportunity”だけでなく“every opportunity”を享受すると述べているのは大変意味深いと思います。日本においても昨今、

女性の働きに対する社会的要請が大きくなっています、それに応えるべく、学生時代に、共学大学では男子がすることの多い役割を全て自分たちで経験し、進んでリーダーシップをとれる女性に育って欲しいと願っています。

中・高における現状・問題点と 取り組むべき課題

前川 女子大学からはこれまでの伝統をふまえて、教学の問題を考えていかなければならないとのご指摘がございました。そのなかでキリスト教主義教育の問題も出ました。そこで中高サイドからもひとつ一貫教育の問題などにもふれてご発言いただければと思うのですが。

奥村 一貫教育というお話なんですけれども、その前に、先ほど大学をめぐる情勢といえますか、そういうお話がありましたように、同じような問題が中高にもかぶさってきているわけですね。数年前には京都で高校生の数が現在の約三分の二ぐらいに、減るといふうにいわれておるんですね。まだ京都の私立学校は他府県から生徒が入ってきているか

ら、大阪とか滋賀県とか、兵庫県からも来ている。だから生徒の減る量につきましてはいくらか他府県よりもましなんですけれども、それでもやはり三〇％、これはずいぶん大きな数で、たちまちいくつかの私立学校が要らなくなるといのですが、そういうふうな状況にこのままほっておけばなるといいます。

だから、私立中高の関係者はその問題がいちばん大きな課題で、まだ私も同志社の場合は、大同志社のなかでわりあいのにきになっているほうじゃないかと思うのですけれども、このあいだの資料にもありましたように、京都の高校の校長先生の会で、各学校で一九九六年ぐらいまでに二五％、お互いに平等に生徒を減らそうという約束を交わそうという誓約書みたいなものを、あれは校長じゃなくて理事長が書くのじゃなかったかと思うのですが、そういうものまでつくりましてやっているような状況なんです。

同志社高校の場合は、同志社中学から大ぜい来るのです。こし違う状況なんですけれども、やはりその流れから逃れるわけにはいかない。だから、同志社高校のアイデンティティ

イみたいなものが確立していかなければいけません。ほかの各私学でも、しきりにそういうことをやっておりますね。

男女共学は、戦後同志社高校がさがけてやってきましたが、立命館高校ではこれを去年ですか実施しはじめたというふうに、他の私学ではいろいろなくふうをしている。同志社高校もそういう流れから逃れるわけにはいかない。

いまのは生徒数の問題ですが、もう一つは一九九四年から高等学校のカリキュラムが、文部省の指導要領が変わってまいりまして、かなり大きな変更があるということです。私、まだ十分内容を見ておりませんけれども、新聞紙上でいちばん先に出ておりましたのは、社会科を解体して公民科と地歴科をつくるというのが出ておりましたが、それから文部省から出されている指導要領の前文には、儀式に「君が代」と「日の丸」を掲げることを明確にするという非常に強い調子の言葉が入ってきたんですね。これなんかは先ほどから出ました同志社の歴史のなかで、これをどう見るかというのは大問題だと思うのです。同志社はとくに戦時中非常にみじめな経験もして

きていると思うのです。中高関係の指導要領のなかにそういうことが明確に文部省から打ち出されてきているときに、われわれどうそれに対処するかということもやはり起こってきておるといことですね。

実際、学力の問題で教科の内容の問題になりますと国際化、これは文部省がずっと言うておるんですね。それから「世界の中の日本人としての自覚」、こういう言い方が随所に出てくる新しい形ですね。私なんか一読しますと人間としての教育というのはどこかへ行きまして、「世界の中の日本人としての自覚」という言葉が繰り返されて出てくる。これも「日の丸」「君が代」じゃありませんが、やはり教育の理念の問題としては大きな問題だと思うのです。

それから数学なんかは、かなり変わるんですね。どういうことかといえますと、いまの中学校の三年生までの学力を整理するというのが一年生です。それが必修で、終わりなんです。あとは全部選択というのが文部省の方針なんです。だから数学のほうから見ておりますと、全体としてはレベルダウン、一部突出という形がはつきり出て、これは理科で

もそうじゃないでしょうか。そういう指導要領の改訂が、五、六年先の高校にやってくる。いずれ高等学校ではカリキュラムの検討委員会をつくって実際にそれに対応しなくちゃならないという問題があるということです。

そういうことのなかで、一貫教育の問題をわれわれは考えなくてはならない。あとでまた発言させていただく機会があるかと思いますが、私どもはいま一貫教育とちよつと離れまして一般的に最近の青年諸君といひますか、高校生諸君といひますか、やはりこの十数年の間にずいぶん様子が変わつてきております。これは日本じゅうの高校生の問題だと思ひますけれども、たとえばどう生きるかというふうなことをじっくり考えないで、どんどん時流に流されていくという傾向ですね。

彼等は高校生活を楽しんでいます。けれども、自分が将来どういふふうにして職業をもち、どんな道で生きていこうかということについて考えるのは非常に苦手で、私どもも生徒の生活指導という面でのエネルギーを非常に使う。また、生徒たちの考えがますます幼くなっている。そういう問題に当面日々の教

育では直面している。やはり推薦の問題とかかわつて私どもの問題の一つだということですね。

高校の抱える状況というのを、全面的じゃありませんけれども、私の感じていることを申しました。

全学的なコミュニケーションを

前川 高校の抱えている問題をお話しいただいたわけですが、高校では一九九四年から新しいカリキュラムになるとのことですね、すでに大学では教育職員免許法の改正にとともなう再課程認定申請の問題で、この夏はたいへんでした。たとえば情報処理教育の問題を一つ取り上げてみても、教育工学という科目を各学部になしく設置するということになつたわけですが、毎年、千名近くの免許希望者がございますから、そのためにも実習室を設け、新しく二百台ほどのワークステーションを増設することになっています。

これで御出席の先生方からひと通りご発言をいただいたので、もうすこし問題を掘り下げて討論をしていただきたいと思いますのです

が、さきほど野本先生から情報化・国際化・学際化という三つの柱についてのお話がありました。情報処理教育の問題がでましたので、もうすこし情報化に関して申し上げますと、大学では昨年の四月に情報処理教育研究委員会を発足させて、その中に二つの小委員会を設け、研究小委員会ではすでに共同研究プロジェクトができており、教育小委員会では同志社の情報処理教育はいかにあるべきかというところで答申がだされております。最近ではとくに情報関連業務といひますか、図書館と計算機センターと視聴覚教室の管理運営の一元化ということで具体的な取り組みに入っております。国際化の問題にしても、学際化の問題にしても、各種委員会の報告書は全教職員にわたっているわけなんですけれども、さきほど望田先生からの御指摘もございましたが、それぞれの問題を議論する場をもつと意識的につくっていくことが必要だと思ひます。この点に関してなにかご意見があれば……

野本 望田先生がご指摘なさつたようなことは、非常に残念だと思ひますけれども起こりうることで、私、いま女子大学のお二人の

先生からおうかがいしたようなことも初めておうかがいすることというか、ああ、そうだったのかと思うようなこと、たとえば短大のこととか、自分ではいちおういろんなものを目を通してあるつもりですけども具体的にピンときていない。短期大学のなかにはつぶれていくところもあるといわれているのに同志社女子大学の場合は大丈夫なんだろうかというような漠然とした気持ちでしか思っていない。高等学校との一貫教育ということでも、大学からはいろいろ問題を感じていますけれども、具体的に現場の先生がどんなお気持ちで考えていらつしやるかということは、やはりこうやつてお話しを直接おうかがいしてみないとわからない。同じように大学内でも情報化とか学際化とか、工学部統合問題だとかいつてキーワードにしてしまうと、なにかもう自分には関係ない、だれかがどこかで考えてくれるのだろうという気持ちになることがあると思いますけれども、学生諸君と個々に接触していると、英語の学力の問題であるとか、あるいはコンピュータを学生が使っているのに教師が使えるかどうかとか、そういうふうに解きほぐしていくとつなが

てくるのではないか。いままでいろいろな委員会、委員会に携わった先生方の数、それから委員会に出てくるまでの草の根のようなコミュニケーションというのは、実際はあると思うんですね。ただ答申だけをボンと読むと、自分とはあまり関係ないのではないかと感じられる。これはコミュニケーションの基本にかかわる問題だと思えますけれども、同志社のなかでのコミュニケーション、つまり情報というのが単なる機械のことではなくて、人間の心と心とが理解しあえるという意味でのコミュニケーション、そういう意味でも情報化ということがふまえられなければならないんだなということを、いまご指摘をいただいて痛感いたします。

具体的には工学部統合問題なんかですと、財政的な問題も出てきます。しかし、有機的な関係のなかで一人一人が自分の狭い立場、狭い実感ということを超えてお互いに協力して同志社全体をどのようにしていくか。ただたんに生き残るということではなく、同志社というのは、ほかの大学がつぶれるときに、われわれだけ生き残ろうというようなことではなくて、生き残るにふさわしい生き生きとし

た生き残り方というか建学の精神をふまえて、日本とか世界にとつて同志社の教育というものが人間を育てていくうえでこういうたいせつなことをめざしていますよという、それが私たちの力でどの程度実現できるかはさておき、そういう心意気というか、そういういたものでこういう大きな問題と、具体的な個々の問題というのをつないで考えていく必要があるんじゃないかと思っています。

教学における大学と女子大学との 協力体制

前川 女子大学からは、さきほど短大の将来について非常に明るい見通しを玉置先生から報告されたわけですが、家政学部は今出川に残るわけでございますね。大学でも新設学部とか新設学科については、これまでいろいろな形で、話は出てきているわけです。

どうなんでしょうかね。大学と女子大学の単位互換制度といえますか、もつと相互浸透ということを考えてもいいのじゃないか。そういうなかでお互いに協力しあつて新しいものを生み出していくこともできるわけですが。こういうことを申し上げていいのかがどう

かわかりませんが、生活環境学部とか生活科学部とかもうすこし新しい時代の要請に添う形での取り組みとか、そこらへん大学との関係も含めまして、せっかくの機会ですのでご発言いただければ……。

玉置 藤本先生が工学部との統合のことについておっしゃったわけですが、女子大学の田辺移転の当初の計画は一九八三年に教授会で承認されましたが、そのときには大学と同じ横割りだったのです。一、二年次生が田辺、三、四年次生は今出川ということだった。ところが、財政的な問題で田辺に家政学部の実験室をつくるのは困難であるといったようなことが出てまいりました。

そうこうしておりますときに、一九八五年に文部次官通達がございまして、いわゆる校地面積のことに關する通達です。それが従来よりも緩和されたわけなんです。それまでは家政学部だけですと今出川校地では足りなかった。学芸学部であればいいのです。ところが家政学部がむこうへ移るといっても、実験室とかそういうのが大変だということで横割りという形できていたのですが、それが緩和されましたので、こんどは縦割りが可能に

なつたわけではす。

そこでいろいろ議論が outcome して、私どもの教員のなかに京都大学の宇治分校で学ばれた方が数人おられましてあのような形はどうしてもよくないという意見などがあり、やはり学生のことを思えば縦割りがいいんじゃないかということ、一九八七年に教務と学生部が中心になって、横割りと縦割りのメリット、デメリットをいろいろあげて検討した結果、現在のような縦割りという形が承認されたわけです。

ですから、縦割りになるまでは、やはりいろいろ議論があつたのですが、さて縦割りになつた場合、いまは英文の三、四年次生がおりますけれども、再来年になれば全部移つてしまします。そうしますと家政学部だけになりますので、今出川校地の今後の使用の問題といったことが出てまいります。

それでことしの四月に今出川校地検討委員会がつくられ、八月末に答申が出されたのでございまずけれども、それによりますと、先ほど坂本先生がおっしゃつたように同志社女子大学の資料室、これをぜひつくらなければならぬ。デントン館というのはご承知のよ

うにいちばん西にあるのですけれども、そこにデントンホールというのがございまして、デントン先生の遺品がごくわずかあるだけなんです、そこをもとにしていろんな資料室をつくつて、これまでの資料を残していこう。

それからデントン館にも家政学部の実験室があります。現在の家政学部の実験室は各建物に分散しておりまして、どつちかといえば非能率的です。ですからそれをなんとかある程度統合したいと思うのですが、実験室を改築しますと建築費が非常にかかりますのでそれは最小限度にして、築真館にできるだけ集め、そしてデントン館はいま申しましたように資料室とか、それから国際交流センター、これはいま田辺にございまずけれども、それをもうすこし拡大して、メアリー・ボールドウィン大学とかそういうところと交流をしておりますので、国際交流ですからこちらから行くばかりじゃなしに、むこうからも学生を受け入れて今出川で勉強させて、そして新心館というのが以前は寮だったわけですから、あそこへ宿泊施設をつくつて収容すればいいんじゃないかと、そういつたようなことで、だいたいデントン館を国際交流センターにす

る、あるいは公開講座を開催してやっていく。家政学部はできれば楽真館と心和館の二つの建物ぐらいいでできるだけ集めるようにしていく。といった答申がでまして、これは今後評議会とか教授会で審議されていくと思うのですけれども、そういったことがございます。

先ほど前川先生がおっしゃった大学との部分的な統合ですが、私どもは、大学工学部には西岡先生がおられるので、よく交流しておりますけれども、非常によく似た研究なんかもしておられるわけですね。ですからそういった点で、先ほど出ました生活環境学部とかいったものは可能だと思っております。

また音楽学科、これはいちおう女子大学では次の改革として音楽学科を音楽学部にしたというの、すでに音楽学科から出ております。ですけれども音楽の場合には、やはり男子が入っていたほうが全体的に幅が出てくるのじゃないか。これは素人考えでございますけれども、そういったことから音楽学部あるいは芸術学部というような形ですというのは可能だと思っております。

ただ女子大学を共学化するというの一般的な流れとしてあります。たとえば帝塚山大

学ですが、あそこは教養学部だけだったんですけれども、ことし経済学部をつくって、それを共学にしました。そして、教養学部も全部共学にし、総合大学をめざして踏みきったということです。また愛知学園大学も昨年まで女子大学だったのですけれども、ことし経営学部をつくって共学にしました。そこには家政学部もありますが、その家政学部も共学にして男子十名を入学させたといったようなことがございます。

他にも共学の家政学部があります。京都の府立大学生活科学部も共学で、食物学科には三〇％の男子がおりますし、住居学科では四七％、かえって男子のほうが多いといったような状態です。そのほか中村学園大学の家政学部とか、あるいは西九州大学の家政部の食物栄養学科とか、そういうところはすべて共学でやっております。

ただ、そういう家政学部へ男子の学生が入ってどうなっているか。いろいろ学生なんかアンケートといいますか調査したものは、それらの男子学生は非常にはっきりした目的意識をもって入学しているということがいわれております。

家政学部の志願者というのは、とくに短期大学部の場合に非常に減少しているわけなんです。ですから短期大学部においては家政という名前はやめて、生活科学とか生活学科とか、そのような名称変更が多くなっております。したがって大学としても、公立大学では家政学部というのを生活科学部に変えたわけですね。ところが私立の場合にはいまだに家政学部が多いですけれども、そういった家政学部系から社会科学系、あるいは理工系へ志願するという傾向が非常に強まっておりますので、先ほど言いましたように工学部の一部と家政学部が一緒になって生活環境学部などを新設するのは一つの方向だと思えます。

ただ、それが女子大学の場合、共学になれば大学の一学部になるとしますと、あとに残るのは、女子大学では結局文学部と申しましょうか、英文学科と日本語日文学科、それと短期大学部になって、女子大内部の活性化がどうなるのかなという、ちょっと疑問が出てまいりますけれども。

工学部の課題

前川 女子大学の場合、短期大学部と芸学部が田辺にすべて移転するわけで、そこでは校地問題があるようですが、大学の場合、たとえば工学部を除いてほかの五学部が全部田辺へ行つたとしても、現在の今出川校地では校地不足で、緩和措置ということがございますけれども、それからみてもむづかしいといわれております。さきほど工学部の差し迫つたいろいろな深刻な問題を藤本先生から出されましたが、校地面積からいっても絶対的に不足しておることなんですね。

ただ移転に際しては、工学部がもし田辺へ行くとなりますと……。

藤本 財政的な問題がありますからね。

前川 その点に関して何かご意見ございますたら……。

藤本 まず校地問題なんです、私が聞いている範囲では、緩和措置をとつても神学部とプラス文法経商のうちの一学部しか残れないはず。それと財政的な問題なんです、いくらかかるか知りませんが、たとえば一万

坪程度のものを考えれば百何十億円というふうにかかると思いますので、それをやつても全学の合意が得られるか、あるいはそれに対応するだけの工学部のビジョンがあるかという問題に尽きると思います。

私は、自分の出た学校で教養のキャンパスから一時間半、バラックで冬は砂だらけという校舎で都合五年間過ごしました。文科系のキャンパスに比べると天と地以上の差でした。その後会社から戻つて再度このキャンパスで過ごし、一九七三年の石油ショックの直前に現状維持で二十三億円で移つております。ですからそれを考えると、だいぶ時間がたっているから二百億円を超えるんじゃないかというのが第一印象だったんですが、そこまではいなくて済みそうだと思います。

工学部のなかでもいろいろな意見がございます、文化の中心である今出川をほおつてまで田辺に行つて、なんの意味があるんだという先生もいらつしやいますし、それから先ほど申し上げましたように京都大学とのコンタクトが深いのにそれを犠牲にする気かと、あるいはいま自宅から近いのに、わざわざ遠い所に行くのはかなわないとか、そういう

問題もございますけれども肝要な点は、やはり教授会を含めて工学部の先生方がどういうビジョンを出すかということ、それによつてほかの五学部の教授会の納得が得られる案が出ないかぎり、はちよつと無理かなという気がいたします。

その一つのポイントは、私が申し上げている大学院の充実です。面積の問題もございまして、教員の数の問題もございまして、新しい学科を別につくるとなると相当大変だと思います。いま工学部の大学院には三専攻ございまして。学部の学生諸君に渡す履修案内なんか見えますと、三専攻で相当重なる分野がございまして。そこで仮の例ですが適当にこれを割り振りすれば、新しい名称で、新しいビジョンを持つ学部を基礎を置かない専攻も含む大学院も可能であろうと私は思います。

あとは工学部の教員サイドからいいますと、教育が第一主義で研究は二の次だという議論がよくあるんですが、われわれの感覚ですと研究をしてこそ、いい高校生諸君が志望してくれまして。近ごろはPRの世の中ですから、有名な予備校からアンケートがよくまいります。あなたの大学ではどういう設備があ

るか、教員はどういう業績を過去五年間であげておるか、まるで文部省みたいなことを聞いてきます。一方、高校生諸君はそういうカタログを見ながら、A大学にしようかB大学にしようか、と進路指導の先生に相談しているようです。これは工学部にかならないと思いますけれども、それが一般的な風潮であるならば、われわれとしてはおおいに研究せざるをえない。

われわれの非常につらいところは、国立の旧帝大と同じように研究をやりながら、しかも教育をして、さつき野本先生がおっしゃったように同志社固有のといえますか、同志社の雰囲気をもった卒業生を社会に送り出していかなければなりません。ところが、非常に話が小さくなりますが、たとえば国際ファックスはいけなとか、国際電話はいけななんていわれますとこれもいろいろなままの流れがあるとも思いますが、研究意欲が阻害されてしまうわけですね。さつき望田先生がおっしゃったような大学院生の研究発表の場の問題も、各学部に通通すると思いますが、やはりこういうこともわれわれが今後生き抜くためには考えていかなければならないと思

います。

前川 いずれにしても、いま工学部が抱えておられる問題は、それ自体どういう形でだろうと解決していかなければならない課題でございします。

藤本 そうなんです。

前川 できれば同志社ならではの工学部のビジョンのようなものを出していただければ、全学的にもそういった問題が議論されて、しかるべきところに落ち着くのかなかと思われるんですが。

藤本 最近、たとえば「機械システム」というふうに学部の名前を変える例が私立大学でよくありますが、実際的な内容は古典機械工学で全く変わらないというのが多いようです。それではだめだと私は思います。

国際交流

前川 問題が多岐にわたっておりまして、工学部の統合計画の問題はこれくらいにして、つぎに国際交流の問題にもふれていただきたいと思ひます。女子大学も国際交流センターの構想があるようですけれども、現在、

大学の方では六つの大学と協定を結んでおり、AKPなんかを含めまして百数十名の外国人留学生が現在同志社大学に来ております。同志社大学からは、ことし初めて外国留学奨学金制度というのができまして、AKP加盟校に、まだ数はわずかですが六名の学生が派遣されています。毎年、夏にはサマープログラムがございしますけれども、最近カリフォルニア大学からの交流の申し入れなどがございまして、もうすこしまとまった単位で一年間ぐらいの期間を考えて、学生の交流が実現できればと思うのですが。またそのさい、受け入れにさいしては、たとえば、英語で「日本事情」というような講義をしていただくとか、カリキュラムの内容もすこし工夫していく必要があるんじゃないかと思うのですが。

野本 国際交流ということでは、同志社の各学校の制度に乗らなくても、すでに教員の方、職員の方、学生諸君はぜひぶんこ数年、活発に外国へ行ったり受け入れたり、ほんとに聞いてびっくりするほど多くのケースがあると思うのです。わざわざ取り上げて国際化とか何とか言わなくても、もう一人の同志社人がボランティアは十分にやっ

ている実績があると思うのです。ですから、むしろそれを受けとめるというか、バックアップするような体制が遅れているのではないかと、つまり、国際交流センターがないとか、受け入れるためのシステムが個々ばらばらであるとか、たとえば京都には外国からたくさん研究者の先生方がこられるわけですから、その先生方が同志社を表敬訪問してくださる。それでその機会に講演を依頼しようとする、そのための費用とか、いろいろなことに頭を悩ませなければならぬ。宿泊費から何かいろいろなことを考えなければならぬ。そうしたことがシステムとして働かないために、ほんの一部しか実現できないというようなことがあります。学生のことしの夏の様子を見ていても、びっくりするぐらい海外に出ているんですね。そして英語やドイツ語の海外での夏期講習、夏期研修に参加しています。学生諸君が帰ってきたときにそれをどういうふうに評価するのかということ、いまのところは評価をするシステムがないのですけれども、学生諸君はそういうことにかかわらず、自分の実力をつけるという意味でどんどん出ていっている。ですから、や

はり大学としてそれを理解し、十分に受けとめていく必要があるんじゃないだろうか。そんなふうな、具体的にものごとを考えていかなければならない、そういう現実と直面しているということをひしひしと感じるわけですね。

坂本 女子大学のことは玉置先生が教務部長がお長いから、先生から言って頂く方がいいかも知れませんが、私も国際交流委員としていくつかの計画に関係して来ましたので申し上げますと、女子大学の国際交流プログラムは、先ほどおっしゃったメアリー・ボールドウィン・カレッジとはもう十年ぐらいこちらからも行き、むこうからも迎えるというふうにエクスチェンジしていますし、短大はイギリスのウオーウィックカレッジに、やはり夏に三、四十名送っています。それから全体で行くプログラムのほかに二年前からスミスカレッジとウエルズカレッジとメアリー・ボールドウィンカレッジとに、むこうに行つて単位を取ってきたら、その単位をこつちでカウントするというプログラムが始まりました。このあいだも学生が帰ってきていましたけれども、わりにそういうことはやっていますね。今一番だじなことは、むこうからもうす

こしたくさんの方に来てもらえて、先ほどおっしゃった英語で日本の事について講義ができるようになること、そのためには日本語日本文学科が大いに役立てるのではないかと、うふうな話にはなっていますね。

先ほど野本先生もおっしゃったように、せっかくむこうで、まあ一カ月という場合はさらにありますけれども、一年間行つて帰ってきた学生にどう活躍してもらうか。また学生自身もむこうで一年間英語のレクチュアを聞いて帰ってきて、折角ついた英語力のレベルを下げないように、更に、ブラッシュアップできるような道が備えてやれないか。むしろ行つて帰ってきた学生の対応というのをこれから考えなければならぬんじゃないかなというふうに思っていますけれども。

前川 国際交流の問題との関連でいえば、外国語教育検討委員会の答申が大学ではできおりますが、生きた語学教育といいますが、外国語センターの問題も提起されています。そういうこともいろいろ問題にもふれていただければと思っておりますが……。

野本 それからアジア諸国の人たちに、どのように勉強する機会を与えるかとかね。最



近藤本先生も韓国に行かれたそうですね。

藤本 はい。ドクターという問題に限定しますが、われわれがこれだけの国になつていきますから、周りのアジア系諸国のそういう要望がある人に対する体制を整えるのがわれわれの義務ではないかと思いました。日本全体でこの面では遅れていると思うのです。

非常に端的に申しますと、私は昭和三十六年に大学の二回生になつていますが、私の関係する分野では、韓国の大学の現状はそのころと実験装置がほぼ同じです。それでは世界の情勢に追いついていません。

それからもう一つ国際交流で考えますと、たとえば在外研究を同志社の先生がなさつたとき、そのお子様方が学内中高にいらつしやつた場合、帰国後学年は一年下がらないといけません。これは話がおかしいのじゃないかという気がします。だいたい似たようなカリキュラムを受けているはずですから、すくなくとも英語を受けてきた子は英語の授業は免除してやるとか、あるいは学年にしても、努力さえしていればもとに戻れるはずですから、それぐらいのことはしてあげてもいいんじゃないかと思ひます。

それから国際交流という点では、教員がa項その他で毎年多数在外研究をしますけれども、逆のケースが客員教授以外ほとんどございせん。これもやはり、むこうからも先生が研究員としていらしていただける、学生もむこうから研究をしに来るといった状況を含めた交流を考えなくてはなりません。そのためにはわれわれが相当ハイレベルの実力をもたないといけませんね。

あるいは同志社の学内の国際交流は、だいたい文化系の学生の諸君を対象にしているように感じられます。たとえばカリフォルニア大学にしてもアーバイン分校のように非常に優秀な工学部をもつてますので、そういうところとの交流もしていただきたいという気がします。

とくに国際高校はいろんなことが言われていますけれども、たとえば私のところにいる国際高校出身の五回生はトイフルを七八〇点取っています。これが国際高校で英語の授業を受けているわけですね。その前の年には八〇〇点を超えたのがおりました。そんなにのんで英語の授業を受けさせなくちゃならないのかという矛盾点はございますね。

(笑)。ネイティブと変わらないんじゃないかと思うんですが。

野本 同志社の自由な教育というか、ほんとの自由というものをもうすこし具体的に一人一人の学生のために生かしていくような、きめの細かい方策が必要になってくるでしょうね。

藤本 国際高校のパンフレットを見ておりましても文法を知らないなどとかいうことがよく書いてあるんですが、田辺に行く電車に乗っておりますと、「ニューズウィーク」なんかをパラパラめくっている学生がいるんです。そういうのに文法うんぬんというのはずいぶん矛盾した話だと思いますね。

望田 同志社の、というふうに限定できないですけども、国際化の交流の点で多くの専門分野で感じているのは、ドイツ現代史関係の者が毎年来て、同志社でいろいろお世話になるときもありますけれども、決定的な弱点は、ディスカッション通訳の体制がないということなんです。通常の通訳ができる人はたくさんいますけれども、たとえば関西でドイツ現代史研究会というのを約八十人で組織しているんですが、そのなかで縦横にディス

カッション通訳ができるのは二人なんです。この二人はきりきり舞いさせられているわけですね。ぼくはいつも頭を下げてその人にお願ひしているけれども、ぼくらの世代ではもう追いつかない。日本のヨーロッパ学は、ヨーロッパに比べていろんな点で劣っているわけですけども、かなりな独自性もあるわけですね。そういう点を十分にむこうに伝えるというようなことをやろうとしてもディスカッション通訳の体制がきちつとしていない。だからこれはいまの院生ぐらいから、長期的な問題ですけども、意識的にそういうことのできる人を養成していかないと、学术交流といつても結局、講演会程度のことをやってお茶を濁しているというだけの状況が多々あるわけですね。

野本 大学院からでは遅いのとちがいますか。それこそ一貫教育のメリットを出せるような長期的な見通しとかね。

前川 学部の父母会なんかに行ってよく相談を受けるのは、英検の一級とか二級の免許を取るために英会話の専門学校に行っているという話をよく聞かれます。同志社には外国人の先生方も沢山おられるし、なんらか

の対応が必要ではないかとおもわれます。

いまもどなたがおっしゃったように、夏休みには多くの学生がアメリカとかヨーロッパに行っているわけですね。一年間こちらを休学して行くとか。また京都というところは有名な学者がつねにだれか世界各地から来ておられるわけで、いまいわれているようなその受け入れのシステム化といえますが、これは国際交流センターになるのでしょうが、そういう形のを考えていくべきだと思いますね。

最後に中高のほうで、これまでの問題との関連でもよろしいし、中高独自の問題でもよろしいし、これだけは言っておきたいということがあれば……。

一貫教育の問題点

奥村 いま国際交流のお話が出ましたけれども、一般的には高校のレベルですと生活体験みたいな形で行ってくるし、またこっちは来るんですね。だけどこっちは来るほうは、そういう体制がないというか、だからやはり高校なら高校で国際交流を意義づけて、それ

ならそれに見合うような体制をとるということとをしないと、American Field Service（高校生のための留学の機関）を希望するのが例年数人行っておるというのにとどまつております。

それにしましても、いまの高校生諸君は休みには気楽に海外へでかけるし、流れとしては学校とはちがうレベルでどんどん進んでいるという感じがするんです。

昨年でしたか、オーストラリアの高校生が二十人、一週間ほど高校生の家に宿泊しまして、学校のホームルームにいちおう配属されました、いたことがありました。むこうの学校の生徒さんのほうが熱心で、またやりたいということを学校に申し込んでこられたらしいのですが、毎年交流ということになりますと、はたと校長さんも考えられたようですね。そういうのを受け入れるとしますと、やはり学校として受け入れる意味をきちつとしておかないといけない。同時にやはり時間も人も要るんですね、プラスアルファが。そういう体制は全然ありませんので、行きあたりばったりでやっているというのが実情なんです。

それから一貫教育の問題がおそらく同志社では非常に大きい関心のポイントだと思えますけれども、先ほど、まもなくカリキュラムの検討をなくちやいけない時期にきているというふうに申しましたが、現在の同志社高校のカリキュラムというのは、ほかの私立の学校とか公立高校とはかなり特徴があると思うのです。一言でいえば、理科でも物理、化学、地学、生物、全部受けさせるというシステムなんです。社会でも地理、日本史、世界史、政経、全部受けさせる。だから選択じゃなくて、高校レベルではできるだけ全面的な知識を身につけてくれという姿勢に立っているんです。そうすれば三年生になったときに、自分の将来について視野広く考えることができるはずだと、こういうふうに考えています。三年生で初めて選択がありまして、国語なら国語でも教養型の国語から、受験型の国語までの選択科目が置かれている。理科でも教養型の理科から、受験的な講座も置かれている。たとえば教養型ですと、公害の問題について一年間やるとかいうふうな形で選択科目が置かれているとか、そういう格好になっています。

そういうふうにして、高校レベルでできるだけ広い視野に立った子どもたちをつくりたいというような趣旨になっているんですが、実はそれは同志社の一貫教育、推薦制度があつてのカリキュラムなんです。だから五年先の新しいカリキュラムについても、われわれどういうふうと考えていくかというのは、同志社のあり方ですね、それをずいぶん議論をなくちやならないだろうと思うんです。

それから大学のほうとの関連でいえば、現在の推薦制度で矛盾があちこちに生まれて、必ずしも私も自身も納得できていないし、推薦される高校生の状況も問題点をもつておるといふようなことなんですけれども、大学のほうでの高校からの推薦制度に対する考え方がちよつとでも変わりますと、同志社高校のカリキュラムは全部検討し直さなければいけないというふうなことになる。

ですから、同志社教育の特色としての推薦制度であるならば、いま申しましたようなカリキュラムまで含んで、どういう子どもを育てるかという観点でのなにか道筋が高校でも理解され、大学でも理解されるようなものがつくれたらいいなと、こういうふうにいる

です。ちょっと理想的なことを言うかもわかりませんが、

望田 一貫教育で、ぼくは常々思っていることが一つあるんですね。一貫教育ないし推薦制度の問題に絡んでは、それこそ大学の教員レベルと中高の教員レベルで、それぞれかなりの言い分がたまりにたまっておつて、そのパイプが詰まっているという状況だと思っています。たしかに役職者が相互に定期的に会うという、システムはあるけれども、どうもそれでは通じてないわけですよ。それでお互いに内向していく状況にあると思うんですね。

ぼくは前から思っているんですけども、一つの突破口として専門分野別の大学教員と、中高教員の、かたい形でない座談でいいから話し合う機会というものをつくるということが非常に重要なことだというような気がするんですね。そういうところでもつとどくばらんに、たとえばぼくであれば、中高の歴史の先生といろんな話をしていく。そうすると役職者レベルでは言えないことでもそこで率直に言い合ったりして、相互の理解というものはもつと進んでいくと思うんですね。

一貫教育というかぎりは、こういう体制というのがだいじだ。

これをからくもやっているのが教職員組合連合なんですね。年一回、秋の教研というところで。ところがそこには、ほとんどいまでは大学の先生は出ないんですね。だから事実上、大学と中高間の交流という点では形骸化しています。だからこの問題に学校サイドが着手して、そこから一貫教育問題は始まるように思います。その他にもいろいろ問題はありますけれども。

野本 ぜひ校長会と組合とが協力して……。ほんとにある意味では深刻な状況ですから。

望田 公式の会議にすると、これは言うのはやめとこうかということになるけれども、もつと平場で話ができるようなものを分野別ぐらいで、できるところからでいいですからね。

藤本 同じようなことですけれども、高校側の先生が大学の授業を参観するというような方法もありうるんですね。非常に言いにくいんですが、大学側は社会に送り出す責任を負っています。どうも私の見るところ、高校

側の先生は大学へ入れたらおしまいという(笑)……。

ドロップアウトする学内高校出身の大学生がけっこう多いんですね。どうもこういった状況を高校の先生方はご存知ないと思わざるお得ません。一貫教育であればこそ、学内高校の先生方も大学の現状を認識していただくためにたとえば望田先生のおっしゃった歴史の会合も当然やればできることですから。

野本 一貫教育の高校のカリキュラムの問題が出ましたけれども、それを大学側として受けとめていくとするならば、これから非常に大きな問題になるであろう一般教育のあり方ですね、やはり早急に大学としても一貫教育との関連のなかでどう位置づけていくか。重複があるところは重複しないようにとか、もつと効率的にしていくなとか、いろいろなことを考えなければならぬ時期です。

奥村 私が申ししたのは、同志社高校ではそういうカリキュラムにしている、ところが香里ではおそらく別でしょう。女子中高でもまた別の考え方にお立ちになっているんじゃないかな。だから推薦制度の見方も、各校ですれがあるかもわかりませんね。

野本 大学では、そういうこともよくふまえないで……。

奥村 しかし、いま野本先生がおっしゃったことは当然あるべき姿ですね。

藤本 機械科では数前から高校の物理に相当する科目があるんです。これはありていに言えば、一般高校の入試突破組はばかにして出ません。それで、その科目をもった先生は深刻なんです。学内高校出身の学生のうちで、毎回いちばん前に座って一生懸命講義を聞いても、全然わからないのがあります。もう首をくくるしかないというような話が出てくるわけですね。高校の復習の科目でこうですから、専門科目ではどうなるのだろうと心配になります。——たとえば私どもの受験時代にあった単元が現在の高校のカリキュラムでは外されているような場合は、当然我々はフォローアップします。ですからそういうのもやっておりますので、すくなくとも学内高校の先生方と、大学側でつきも望田先生がおっしゃったような場合は早急に設ける必要があると思うんです。

前川 それは工学部だけの問題ではなくて、やはり最低の基礎学力はどの学部でも必

要なことですし、私の学部ではとくに学部紹介に力を入れております。学部に入ったらどんな勉強をするのか、どんなコースがあるのか、できれば希望する学生は全部受け入れたいわけですが、教授会ではなかなかそうもまいるませんで、たとえば語学に関しては、かなり手厳しいご意見が出ております。今後高校サイドでも、もともと優秀な子が来ているわけですから、そこらへんのことはよく考えていただき、いまま具体的な提案が出ておりますが、ひとつお互いに一貫教育の実をあげていくように交流を深めていきたいと思いますね。

奥村 基本的な知識の欠如といいますか、その問題は、いまおっしゃっていたいていような方法、それから高校側での努力とくふう、それで早急にとは言いませんけれども、私は解決できるという気がしています。

それと推薦制度のマイナスの面の一つ。意欲の問題とかそういう問題については一般的な私どもの課題ですね。おそらく大学へも引き継がれていくような課題ではないかと思うんです。

各学校の自主性の尊重と 理事会のリーダーシップ

前川 いろいろな問題が出されたわけですが、進学人口の激減期ということを冒頭に申し上げましたけれども、たとえば中学はもうその激減期に入っておるわけで、おそらく今後このままいきますと、なかなか大変な問題に直面することになるのではないかと危ぶまれます。また情報関連業務のことでさきほど管理・運営面での一元化の問題を言いましたけれども、この問題もたんに大学だけではなく、本部、女子大学あるいは中高を含めて取り組んだほうが、効率化の点でいえば、有利なわけです。もちろんこの問題はたんに効率化だけで処理すべき問題じゃないと思いますけれども。また女子大学と大学との相互浸透の問題でもましたし、いろいろ考えていきますと、これからは理事会自身がもうすこしニシアチブを発揮していただくといえますか、そういった問題に取り組んでいただくねばならなくなってくるのではないかと思うのです。どこかの学園のように、学校的意思を無視して独断専攻でやられる理事会は困り

ますけれども、これからは冬の時代を迎えるわけで、各学校がおたがい協力しあうとともに、学内のそれぞれの教学問題をふまえて、理事会自身もつと乗り出して取り組むべき課題が起ってくるだろうと思います。ここには理事の方が二人おられますので、最後にはそういった問題にすこしふれていただければと思うのですが。

野本 同志社の理事会は弱体であるところにすばらしい意味があると思って末席を汚しているわけなんですけれども、たしかにおっしゃる通りに理事会の責任というものをもうすこし具体的に考えて取り組んでいく必要が出てきているのではないかと思います。ですから理事のどれかの意見だけで同志社が動くということではなくて、同志社の一人一人の先生方や職員の方のご意見を十分ふまえていく。それらのご意見とともに、各学校のニーズと、それから利害が対立するようなこともあるでしょうけれども、そういった課題の解決に向けて貢献できるようなと申しますか、サービスできるような体制を理事会として考えていく必要があるだろうと私は思っております。坂本先生もごいっしょに、すこしでも

できたらと（笑）……。

望田 理事の方が二人おられるのでちょっと言いにくいんですけども、野本さんがいみじくも自己告白されたから安心して言いませけれども、たしかにいまそういう問題があると思うんですね。ただ野本さんもおっしゃったように、歴史的に同志社では理事会というのはいさまりリーダーシップを発揮しないほうがいいんだという、そういう暗黙の了解があったと思います。逆にいえば各学校の自主性でやっていくんだという形できたわけですね。よくも悪しくも。それが現代の状況のなかでは各学校間の利害の調整を含めて、もつと全同志社的に一定のプランニングとか、そういうことも考えなければならぬ状況になつてきていると思うんですね。

ところが、そうなってきたけれども、これは組織のしくみ自体すべてが解決するとは思いませんけれども、現在の理事会構成ではたしてこたえられるのかどうかという点に疑問がある。というのは、やはり学部長とか校長さんとか、いわば教学の節目に立っている方も理事になつていただく。そして全体は大理事会制にして、日常的には学内理事会制を

確立して、そこで先ほど指摘されているような問題に対応していくような、体制とあわせて考えないと、長年、あまりリーダーシップを発揮しないほうがいいんだという禁欲の精神できているわけでしょう（笑）。だからそういう体制も変えて、これからはしかるべき問題ではリーダーシップも発揮するんだというような、そこをセツトに考える必要があるというのがぼくの考え方ですけれどもね。

前川 理事会の改組問題が出てきたわけですから……。

野本 それも一つの考え方だと思いますけれども、たとえば理事会のほかに、校長会あるいは学校長会というのがありますね。校長会も月に一回とか集まるんですけども、正直いつてあまり機能していないわけですね。

望田 あれは懇談会じゃないんですか。

野本 いわゆる懇談会ですよ。だけれどもそこでたとえば各学校の意見がもつと話し合われ煮詰められて、ある程度のもまとまりができていくことができるんですね。ですから理事会を一挙に改組するというのも一つの考え方かと思えますけれども、いまある組織そのもの

のがもつと活性化すれば同志社としてメリットが出てくるような気がいたします。そしてその過程で、やはりここがネックになるとい

うような組織があれば、そのときには思いきった改革も必要だと思えますけれども、非常に優れた組織は各所に実際はあるんですね。

ありすぎてだめなのかも（笑）しれませんが、それでも、私は校長会などをもつと各パートの意見とか、相互交流というものがなされていけば、コミュニケーションは非常によくなくなるんじゃないかと思いますが、ぜひそういったことも……。

望田 そこらへんは、具体的な方策ということになるとちよつと議論の余地がありますけれどもね。

前川 いやおうなしに、これからは理事会自身がそれなりのリーダーシップを発揮して取り組まないと大変なことになるような問題が起こってくると思います。たしかに各学校の自主性を尊重するということが、先ほど野本先生が言われたけれども、それはそれなりに大きなメリットがあるわけなんです。またそのことが大前提になりますが、しかし、問題が起こってきたときに、手をこまねいてい

ては同志社にとつては大変なことになるという危惧ももたれますのでね。

望田 その逆の面ですね、つまり大学の自治とか自主性とか、大学のなかでそういうのがいちばん強いのではないかと、他の各学校に比べたら。だから、大学のなかの役職にあたる人たちが実際の仕事をしていくなかで、どうもそれだけではと感じてきた、そういう段階にさしかかってきて先ほどのご発言があると思うけれども、大学全体でみると、むしろネガティブな雰囲気強いので、それとの兼ね合いがあるから、すぐそこへもつていこうとしてもなかなかという気がします。

前川 どうも司会が不手際で、与えられた時間内に、問題を深く掘り下げて新しい方向を打ち出すというところまではいけなかったように思うのですが、これを一つの契機にしたいいただき、今後同志社時報でもまたこういう企画をもたれるでしょうし、本日は問題提起の会ということで、座談会を終らせていただきます。どうも長時間ありがとうございました。

（一九八九年九月九日収録、於有終館第二会議室）

同志社談叢 第六号

論文

磯貝雲峰の生涯と文学……………河野仁昭

『荒村遺稿』未所収松岡荒村同志社時代
の作品……………天野 茂

星野徳治の日記とその時代……………相川尚武
棚あげされた同志社憲法……………和田洋一

同志社と香里学園の合併問題……………喜多正明
——香里所有の資料を中心にみた——

「新島襄旧邸」保管の石鏝をめぐるつて

——旧石器時代の環境と文化——……………鈴木重治

資料

同志社常務委員会記録

自・明治三十七年四月廿十日
至・明治四十四年七月十日

『同志社談叢』既刊総目録

新島襄に関する文献ノート

（その六）……………河野仁昭

（頒価一、〇〇〇円）

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

電話（〇七五）二五一—三〇三七・八

同志社の将来

はじめに

同志社の将来にとって必要なことを一言で示すとすれば、伝統的なものを核として強固に維持しつつ、変化に対応しうるフレキシビリティを備えることにある。

右の伝統とは、キリスト教主義教育にもとづく私学教育としての自由闊達性であり、変化とは、国際化、情報化、専門化を意味する。本稿では、これを基本的理念とし、相互に関連性を有するが、一応次のような二つの課題を設定して、私見ではあるが、単なる精神論にとどまらず、できるだけ具体的な提言を試みてみたい。

第一に、教育システムの枠組の整備・充実の必要性に焦点をおき、とくに大学院の今後のあり方についての提言をし、第二に、法人の統合システムを念頭において、法人の各組織をより機能的・効果的に運営していくための提言を中心としたい。

一 教育システムの枠組

安 枝 英 紳

学校の役割は、人を育てることにある。学校法人同志社も、日本社会および国際社会に貢献しうる人材を輩出することを第一の目的にすべきと考える。とくに同志社は幼稚園から大学院までを擁し、高等教育としての一貫教育のシステムを備えているから、人材育成の視点を、当面の大学卒業生主体から大学院修了生をも包摂する方向に移していく必要がある。これらの人材は、総じて、正義に対する鋭い感性を有し、人の生き方に対する評価についての懐の深さをもつことを共通項とすべきである。

したがって、教育を通しての人材育成のシステムは複合的でないべからぬ。具体的には、専門的な知識や技術の習得が要件となる人材育成システム、秀れた経営感覚を身につけた企業家の人材育成システム、社会への献身と奉仕を旨とするサクリファイスの精神を醸成する人材育成システム等の充実・完備が課題となる。そのた

めに必要なハードであれば、たとえば会計士試験や裁判官・検事・弁護士資格取得のための司法試験に対応する研修所の設置、講座の拡充による教授ポストの新設、教育機器の整備への適切な投資等を惜しむべきではない。このようにして、正義に対する感性の豊かさをスクール・カラーとする同志社人が、政治家、法曹家、企業家、芸術家、奉仕家、教育家として日本社会と国際社会に横溢していくことを目指す必要がある。そのためには人材評価の価値基準が一元化してはならず、多元性が求められるわけである。

さて、教育システムについての現在の最重要課題は、大学院の拡充・整備・充実にある。各領域における専門化という変化が、社会の求める人材へのニーズに影響を与え、従来の大学教育の枠組を改革させる動きを可速化させている。文部省がすでに具体化している、①独立大学院の設置(学部をもたない大学院)、②大学院への飛び級制度の導入(学部の三・四年次生からの大学院への入学)は、必然的に大学の一般教育への見直しを迫っており、同志社もこれに適切かつ賢明な対応をすることが緊要のものとなっている。

このような大学院制度の問題は、第一に、いかなる大学院修了者の人材を育てるかという側面と、第二に、誰がその育成を担うかという側面とを有している。

第一の点については、伝統的には、大学院は研究者養成機関として位置づけられてきた。しかし、これまでの大学教育におけるよりも、いまだ専門化した知識や技術を身につけた人材が求められており、大学院という教育システムを改組することによって、そのニーズに応える必要性が生じている。そこで、たとえば法学研究科を

例にとるとすれば、研究者養成という伝統的な核を中心にすえながら、とくに前期課程(修士課程)においては、司法試験や国家公務員一種試験を希望する者、あるいは企業の法務セクションで法律的な仕事をする専門職を目指す者等への受入態勢を整えるべきであろう。大学院修了者の人材の多様化を図るための枠組設定に、今後最大の努力を払うことが求められる。

具体的な提言としては、試験制度の複数制、開設講座の豊富化、教育方法と学位認定制度の独自性等を示すことができる。

第二の点は、定年制の問題ときわめて密接な関係を有する。私見としては、とくに長年にわたって同志社人として教育に携わってきた者で、当面少なくとも七〇歳までの教授については、大学院修了者の人材育成を担ってもらう途をひらいておくことが望ましいと考えている。その理由は、私学にとつての財産と競争力は秀れた研究者・教育者としての人物をいかに豊富に有しているかという点にあり、それにふさわしい人については他大学へ移ったり、引退するのではなく、可能なかぎりキャンパスで息づいてもらうことが、次の世代の人材育成に大きな寄与をすると考えからである。

しかし、いくつかの条件がある。まず、学部と大学院の組織の分離を明確化し、学部教授会と大学院研究科委員会の運営とを区分すべきである。つぎに、学部教授会における所属定年年齢は六五歳とし、それ以後は研究科委員会所属の教授として定年年齢七〇歳までの任用を可能とすべきである。さらに、大学院教授としての任用にあたっては、研究科委員会がこれを議決することとし、審査委員会において実質的かつ総合的に審議すべきである。

このようにして、今後大学院入学者が多様化すると同時に量的にも増加していく状況に対し、とくに同志社人としての人材育成に薫陶力を発揮してもらうことを期待しうることになる。大学院教授に對しては、必要があれば学部教授会から講義を委嘱し、たとえば学部ゼミを担当してもらい、複数の大学院生をチューターとして出席させ、学生と教授との世代間のギャップを埋め、大学院生には研究と教育のあり方を実地研修させることができれば、きわめて大きな教育効果が生じよう。

また、現行研究所組織の改組と併行して独立大学院の設置が可能とすれば、これまでにみられなかったタイプの大学院教授の任用も可能となるであろう。大学院教授の名称や待遇等については、いまだ少し時間をかけた検討に委ねるべきである。性急な六五歳一律定年制は、現行制度の持つメリットをも喪失せしめる危険がある。定年性の問題は、大学院の拡充・充実の課題とセットにして検討すべきである。

二 法人の統合システム

同志社には、学校法人同志社の下に、同志社大学、同志社女子大学（短期大学部を含む）、同志社中・高等学校、同志社女子中・高等学校、同志社香里中・高等学校、同志社国際中・高等学校、同志社幼稚園があり、ローケーションとしては、田辺ゾーン、今出川ゾーン、岩倉ゾーン、香里ゾーンから成り立っている。将来における「同志社の生きる道」は、学校法人同志社全体のあり方を視野に入れた

ものでなければならない。

第一に、現在の四つのゾーンを青写真にした長期的な計画策定の必要がある。

まず、土地利用の合理的な配分が考慮されるべきである。とくに土地の譲渡にあたっては学校間の必要度の調整を最優先し、第三者への売却は最後の手段とすべきであろう。また、思いきった学校の地域的統合の可能性を探るべきであり、その際は、同志社全体の今後の構想を念頭において、各構成員が議論しなければならない。

田辺ゾーンに関しては、二〇年ないし三〇年後には、学研都市としての整備とともにその活用度が第一となり、抵抗感もうすれてくるものと思われるので、壮大な計画を予定しておくべきであろう。しかし、五〇年単位で考えたとすれば、今出川ゾーンを離れるべきではなく、考え抜かれた教育システムを置くことがベターであろう。なお、田辺ゾーンの現下の活用法については、語学研修センターや留学生センターを設置し、ネイティブ・スピーカーがキャンパスに常にあふれているという状況をつくりだしたい。国際化への対応の第一歩である。

第二に、卓越した指導性と、秀れたコーディネーターとしての資質を備えたリーダーを生み出す工夫を常に心がけておくべきである。とくに法人理事会と総長のあり方については、発展した同志社を想定したイメージ・アップが求められる。

法人組織の規模を考えると、理事長と総長の役割はますます大きなものになる。総長は教育者のシンボルとして、各学校のキャンパスで生徒や学生達と共に語りあい、人としての夢を、教育の熱を、

人の生き方を伝える仕事に適していよう。総長にはこうした役割にふさわしい人が選ばれるべきである。

他方、理事長については学校運営（「学校経営」）に才腕をふるえる条件が不可欠であり、校友の中に、会社経営等の経験者で、私心のない人格高潔な人物を探すことも一案であろう。そのことを通じて、校友会、同窓会組織を強固なものとし、同志社の伸長に対する物心両面にわたる自然発生的な援助を期待すべきであろう。

第三に、学校法人同志社内の人的交流を積極的にすすめていく必要がある。

まず、教員の交流については、半年あるいは一年単位の学内研究交流制度を設けたり、あるいは特別のプログラムを設けて大学教員が中・高等学校の生徒達と接する機会を創出すべきであろう。一貫教育は精神的なものによって与えられるものと同時に、人の交流の中からも実現させなければならない。

つぎに、職員の人的交流については、とくに法人部局のあり方を含めて早急に取り組むべきことと思われる。法人の財政分担に関しては大学が最も大きな担い手となっているが、いたるところに組織的重複がある。これをかなり思いきって簡素化・合理化する必要がある。

なお、職員の職務と人事体系のあり方に関しては、ラインの構成を中心とした配置と昇進というシステムと共に専門職制度の導入も想定しなければならないであろう。職員には多くの分野の仕事をこなせることが、望まれるが、研究室業務や図書館業務についてはある程度のスペシャリストの育成も大学の研究機関としての質を決定

づける要素となるので、職員の人材については、民間企業のそれとは異なった評価の視点も求められる。

右のような配慮を通じてとくに若い職員層に仕事に打ち込める安定感と期待とインセンティブを与える工夫をしなければならない。

おわりに

以上は、日頃、同僚の方々と同志社の将来を熱きおもいで語りあう時に、また諸先輩の経験を拝聴する時に、どこかで共通の話題となったことでもあるが、あくまで私見であることをお断りしておきたい。

なお、同志社が社会的にプラス評価を受けるためには、高い教育水準を維持することが大前提となるから、各構成員がさらなる研究成果への努力を傾注すべきであろう。その意味では教育・研究の分野においては、中学・高校教育を含めていま少し競争社会たる性格が強調されてもよいと思われる。他方、社会に対するアピールも大いに必要であるから、情報伝達手段の利用についても工夫すべき点が残されている。ただし、社会全体の「軽き」の風潮に流される必要はない。そのために伝統が価値を発揮するのであり、また、そのためにこそ伝統を創りあげなければならないのである。

（大学法学部教授）

●進学人口の激減期にそなえて

サバイバル時代の大学

篠原 総一

社会の個性化と企業の対応

いま、社会は個性化の時代だという。誰もが同じモノを食べ、同じモノを身につけ、同じテレビを観る、そんな単純大量生産と画一の時代を乗り越え、気がついてみれば、日本はいま、多様な商品の中から自分の感性にあつたモノだけを大切にする時代を謳歌している。

そう言えば、つい数年前まで、ビールはビールだった。ところが最近では、やれスーパードライだ、ハートランドだ、いやラガーがいい、と人それぞれが好みを主張する。感性は遊びの世界をも支配する。われらオジンがまだ若かったころ、日本は高度成長の真っただ中、学生の遊びと言えばパチンコに麻雀、と相場は決っていた。そんな世代には、昨今の若者の遊びはあまりにも多彩で華麗にすぎ、ただただ脱帽するのみである。とにかくモノがあふれている。豊富な種類の中から好みに応じて選べばよいのである。服装から持ち物

まで、自分の感性を表現できる多様化の時代はすばらしい。

だが、個性化とは選別化の時代でもある。好きなモノを選ぶということは、逆に言えば、嫌なモノは選ばないということなのだ。嫌いになればいつでも捨てますよ、という意味だといつてもよい。だから、選ばれる側は常に組織の存亡を賭けたビジネスを強いられる。そんな状況で売上げを伸ばすためには、とにかく、買手が何を求めているか、いち早く「情報」をキャッチし、製品を顧客のニーズにすりよせていくことである。「少年ジャンプ」というコミック誌は毎週五〇〇万部という発行部数を誇っているが、その秘密は読者のアンケート調査にあると言われている。毎号、閉じ込み葉書を入れ、読者の返答をその場で集計し、評判の悪い作者は連載中でも即座に切り捨てるといふ物凄さである。

しかし、本当にそれだけで大丈夫なのだろうか。感性とは、もともと、移ろいやすい性質をもっている。刺激に対して人が直感的に感じとる印象が、いつまでも同じパターンを繰り返す保証はない。

だからこそ、消費者に媚びるだけの企業の経営は危ういのである。

先日、ある研究会でMホームのM社長からこんな話を伺った。顧客の好みを聞き入れて、注文通りに造った家は、概して寿命が短いそうだ。M社の経験では、建てた当初こそ、自分の感性にあった素晴らしい家だと思えても、住む側に飽きが来るのも早いという。家というものは、しょっちゅう買い替えるものではない。だから、一〇年なり二〇年という長い間には、社会が変わり、環境が変わることも頭に入れておかねばならない。第一、住むヒトの好みだつて変わってしまうほど長い年月にわたって使い続ける商品なのだから。そんな中で、一〇年たつても「いい家だ」と言われるためには、顧客のそれぞれの好みに逆らつてでも、買手がそこで暮すという観点から「住むこと」を総合的に考えた概念を売りたい、というのがその話の主旨だった。顧客は住宅建築のプロではない。大半は、長年の夢がかない、初めて自分の家を建てる初心者である。長い目でみれば、その初心者の場当りの個性化と多様化に振り回されるよりも、あえて、プロの分析力と情報に立脚した「家のあり方」を買手に押しつける方が結局は顧客のためになる、というわけである。

大学の対応はカリキュラムから

上の二つの話は、これからの大学のあり方と深い係わりをもっている。社会の高齢化が進み、大学進学の大人口が減少するとき、有り余る大学に限られた学生を求めて、互いの競争を激化させることは確実だ。大学が学生を選別するという従来の入試選抜の発想が

崩れ、逆に学生がトレンドイイな気分て大学を選ぶ時代を迎えると言つてよからう。すでにアメリカでは、大学産業の生き残り競争が始つて久しい。一部は市場を求めて、日本へ進出しているほどだ。また、日本でも、これからは伝統のある大学といえども、内外の大学との間で顧客(学生)獲得ゲームを展開せざるをえないのである。

その上、社会の情報化によつて伝統校の競争条件は一段と厳しくなる。情報処理と情報伝達の技術が進めば、どの大学へいけば、なにがで、なにができないか、といった大学間の違いを誰もが正確に知るようになる。商品の質が細かに分からないとき、老舗(しにせ)の信用力は強い。だが、品質に関する知識が公開されるようになれば、伝統とブランド名の威力は薄れていくのである。

しかし、だからと言つて、学生の好みにおもねり、その人気取りに右往左往していたのではなにの解決にもならない。一円玉の重みに気をとられ、かえつて全体を見失う台所感覚のような、目先の利益に振り回される愚だけは避けたいものである。大学とは、あくまで、学生がじつくりものを考え、判断する方法を学ぶ場である、という本来の役割を忘れてはならない。学ぶものの好みに合せてカリキュラムを組み、どの科目からでも好きな順序でどうぞ、というカルチャーセンター方式では困るのだ。方程式を解き、微分・積分を学ぶには、まず数や論理の概念をマスターし、九九を覚えねばならない。だが、九九の暗記は面倒なので、四則演算は後回しにして微分から先に勉強したい、と言われて、もつともだとうなずくわけにはいかない。それでは微分の早わかりは可能でも、とうてい、微分の原理を正確に理解し、それを応用してものを考えるという水準に

到達できるとは思えない。学生の好みに迎合すれば、いつときは人気大学にのしあがるかもしれない。しかし、長い目でみれば、品質管理を怠る大学に活力を維持する可能性はない。結局、四年間という在学期間でいかに考える力を養うかという観点から、総合的かつ系統的なカリキュラムをつくり、その主旨を学生にも分かりやすく説明することが肝要ではなからうか。

そのためには、カリキュラムを学部レベルでの見直しに限定せず、一般教育や学際領域、大学院まで含めた幅広い見直しを進めたい。また、学生が在学期間を通して総合的に学ぶとは、教員が協力して総合的に教えるということでもある。各講義の内容が全体として整合性を保つためには、教員の専門分野を念頭においた科目編制を廃し、システムとしてどのような科目が必要か、どの科目でなにを教えるか、という連繋プレーの発想が大切だと思われる。

組織の活性化を進めるために

組織というものは、それが国のような大組織から、小さなグループに至るまで、例外なく規則や暗黙のルールをもっている。だが、組織を取り巻く環境が大きく変わるとき、それまで機能していた規則や慣習が、かえって組織の活力を阻害することも多い。

国際化という変化一つとってみても、考え直すべき点が少なくない。海外の大学と開かれた学生交流を展開していくためには、受入れ基準、登録、単位の変換、学位、授業料の扱い、交流資金の手当など、従来の範疇では処理することのできない問題がでてくる。同

志社大学では、すでにある程度の制度の改変を進めているが、それでもまだまだ、学生・教員両レベルとも、国際交流の障壁は高いというのが実情である。

情報化の影響も大きい。すでに指摘したように、社会の高齢化と個性化が、限られた数の学生が大学を選ぶという状態をつくりだすため、大学間の競争が激しくなる。だがその場合にも、学生の数を確保したいという理由だけで、安易に学生の好みに迎合してはならない。情報技術の進歩によつて、広く一般社会が各大学の内容を細かに知るようになれば、大学が名前や量よりも質で評価されるようになるからだ。結局、「学問に王道なし」と言われるように、よいカリキュラムを作り、それを地道に実行すること、これ以外に途はないのである。

とはいえ、学生の感性を完全に無視してよいわけではない。大学が独り善がりの解答を用意したところで、学生や企業が大学を見捨てれば大学は死滅する運命にある。そのためにも、社会が大学に何を求め、それに対して大学がどのように応えうるか、社会と大学、学生と大学の対話の径路を日頃から開けておかねばならない。大学の広報活動は、その具体的手段として有用である。社会が大学取材するよりも、大学が自らの情報を社会に向つて発信する方が、その内容を正確に伝達できるからだ。

情報活動を通して大学を外に開く一方、大学組織内の競争条件を整備することも活性化の鍵である。一般に、同じ土俵で競争する相手をもつ組織には活力があり、そうでない組織はマンネリ化するという。確かに日本の民間企業は互いに熾烈な競争を展開している。

そして、その日本企業の自己実現力は旧くから高く評価されることである。しかしわたしには、他に競争相手をもたない官僚組織も十分な活力を維持しているように見える。だがよく考えてみると、官庁には外部との競争という条件は欠けているが、組織内部では激しい人事競争を展開していることが分かる。とくに中央官庁では一〇二年に一度の割合で人事移動が繰り返され、その度に責任と権限の範囲が少しずつ広がっていく。しかしそれは次のステップへの職業訓練であると同時に、与えられた職務を期待通りにこなす力があるか、どうかをチェックする制度でもある。官庁では、一見、年功序列にしたがって誰もが順調に昇進していくように見えるが、ポストの数は年齢とともに極端に少なくなっていく。だから、実は日常職務を通して、昇進する者とならない者の厳しい選別作業と、生き残りを賭けた状態な競争が繰り返されているのだ。そしてわたしはそれを、日本の官僚組織の内部活力の源泉と見たいのである。

これに対して大学では組織内競争条件を確保することが難しい。教員の昇進はほとんど無競争で進められる。職員レベルでは役職ポストが少なすぎるため、官庁のような競争インセンティブが生まれにくい。転勤の機会もない、小規模組織に共通の欠陥が大学の活力を奪う一因となっているのだ。しかし、われわれは手をこまねいているわけにはいかない。学生獲得という外からの競争が激化するこれから、大学といえども、今までのように安閑としていたのでは、とうていサバイバルゲームを勝ち抜くことはできない。内部活性化を念頭においた人事制度の検討を進めると同時に、個人の利益や権利がある程度は犠牲にしても、それぞれが組織としての大学の活性

化を顧みる必要があるのではなからうか。

さて、なにをすべきか？

いま、大学を取り巻く環境変化は激しい。進学人口の激減、社会の多様化、教育の国際化、情報技術の進歩など、いずれも従来の大学のあり方を転換させてしまう規模の変化が同時に進行している。なにかにつけ出足の遅い大学が、一部とはいえ危機感をもって自己改革に乗り出していることが、地殻変動の大きさを何よりも雄弁に物語っている。

入試制度の多様化はその一例である。だがどの大学の改革案をみても、入試制度のどこを、どのように多様化すれば、なにが起こるのか、はつきりと認識してコトに当たっているとは思えない。大学が学生を選別する時代が終り、逆に学生が大学を選ぶ時代に移るとき、大学は一体どのような基準で学生を選別すればよいのだろうか。国際化の急速な展開も、旧態依然たる国際交流の全面見直しを迫っている。さらに、コンピュータを中心とした情報の整理、格納、通信革命は大学図書館のあり方や事務処理の概念を根底から変えてしまうが、それに伴って、施設と組織構造の調整、人事の再配分など、考えるべき課題は余りにも多い。

だが、新しい環境にふさわしい大学の制度改革を考えると、過去の経験に過大な期待をかけることは慎まねばならない。これまでの制度や慣行の枠内で対処できるほど、生易しい変化ではないからだ。また、問題が発生するに度には個別に解決を探るという方法も避

けねばならない。科目編制、学際領域の整備、国際交流、人事、行政改革、入試制度など、個別に処理すれば、問題が複雑になるばかりか、哲学なき場当りの対応に終る危険が高いからだ。いま大切なことは、第一に、環境変化の意味を客観的に分析し、次に、新しい

(大学経済学部教授)

扉の写真について

デイヴィスの新島伝とその訳本

新島襄の最もよき理解者であり協力者であったジェローム・ディーン・デイヴィスが、新島の伝記 *A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima* を丸善から出版したのは、新島永眠の年、一八九〇（明治二十三年）十一月であった。

来年一九九〇年一月二十三日は新島永眠一〇〇周年に当たるとのだから、この伝記も一〇〇年の歳月を重ねたわけで、文字どおり新島伝の古典である。

デイヴィスの初版の前書きによると、誰かの依頼によって書いたようである。同志社の卒業生たちが、新島を記念する神学館を建てる決議をし、建築資金の募集に着手するのは、新島の葬儀の翌日、一月二十八日である。そうした動きから察して、デイヴィスに伝記の執筆を頼んだのは、彼ら卒業生たちであろう。デイヴィスはその最適任者であった。

彼はこの年の四月、大著『基督教之基本』を出版するなど、神学者としては最も充実した時期にあった。

依頼に応じたデイヴィスは、新島からもらっていた手紙や新島の日記、ミス・マッキーンが書いた *A Sketch of the Early*

時代にふさわしい大学のあり方を模索する、その上で、個々の課題を全学レベルで取り上げ、あくまで総合的な見地から検討を加えていくという理解ではなからうか。

Life of Joseph Hardy Neesima (1890) などを参考に、比叡山に籠るなどして書きついだ。

「これは後ほど必ずや日本とアメリカで出版されることになるであろうより詳細な伝記への序章として役立つのではないかと考える」と、デイヴィスは初版の前書きに書いている（北垣宗治教授訳）。謙遜でもあらうが、十分なものではないという思いがあったのもたしかだろう。新島永眠一周年に間にあわせるために、デイヴィスは急がざるを得なかったのである。増補改訂版は二年後にアメリカで出版された。

初版の訳本は、二カ月ほどのち、一八九一年一月に『新島襄先生伝』の書名で警醒社から出版され、これも一周年記念日の間にあった。訳者は明治二十年に通科を卒業した村田勤、松浦政泰の二人で、彼らはおそらくグラ刷りによって翻訳したのである。

やがて一九〇三（明治三十六）年に山本美越乃による『補正新島襄先生伝』が警醒社から出版される。彼は明治三十一年に同志社高等普通科を卒業した人で、初版の訳にかなり多量の新しい資料を加えている。一九七五年に北垣宗治訳『新島襄の生涯』が出版されるまでは、この山本の訳本が、最良の伝記として読みつがれていたのである。

(河野仁昭)

廃墟にならないために

同志社女子大学で教えるようになって十五年になる。気持ちちは若いつもりでも、あと数年もすれば自分の娘と同世代の学生が入学してくるのかと思うと、やはりおじさんなのだと納得してしまうのが何とも淋しく悔しい。『おじさん改造講座』を読んでふと身につまされることがあるのも、年齢のせいだろうか。だが、女子大学の英文科の男性教員の中では今もって最年少（ただし日本人のみ——実はここまで範囲を絞らなければならないのが辛い）なのだから、一応若手なのである。しかし四十歳になろうという人間が一番年下だというのは、いかに何でも無茶ではないか。二十代、三十代のイキのいい連中がいてこそ、組織も活性化され、研究、教育活動も盛んになると言えるだろう。その意味では近頃の女子大学英文科、様々な面において沈滞しているように思える原因の一端は、このあたりにあるのかも知れない。

それにしてもこの十五年間に、女子大学も大きな変化を遂げた。研究助手として奉職したのが昭和五十年十月、全学教授会のメンバ

小林章夫

ーも現在の半分ぐらいだったし、もちろん学生数も今よりずっと少なく、小じんまりとしていた。新任早々とて、最初の数年間は学内の雑用もほとんどなく、授業の準備と研究とで毎日が明け暮れていた。もちろん当時でも学内には色々の問題があつて、役職にあたられた先生方は忙しい日々を送られていたのだろうが、それでもずいぶん余裕があつたように記憶している。授業や研究の合間には研究室事務室に寄り集つて、色々な話題に花が咲いていた。学生が悩みを抱えて研究室へやつてくれば、じつくり話を聞いてやるだけの時間もあつたように思う。

しかし、こうした静かな時代も、いわゆる田辺計画の進展とともに過去のものとなつていった。短期大学部が作られ、音楽学科の定員が増え、さらには日本語日本文学科が学芸学部内に設置された。教員数は大幅に増加し、学生数も増え、女子大学は今出川と田辺という二つの校地にわかれて授業が行なわれることとなる。古い建物が売却され、新しい建物がいくつも建設されていく。こうした動き

の中で、数え切れないほどの会議が行なわれ、様々の議論が戦わされてきた。少なくともこのことよって、研究、教育に本来なら割かれていたはずの時間がずいぶん失われたことは間違いない。その限りでは、女子大学のみならず、同志社全体、あるいはひよっとすると（小声でそっと述べるが）日本の社会、文化にとつて貴重なものが多く失われたかも知れないのである。

けれども、こう述べたからと言って、この十年近くに渡る同志社女子大学の歩みを決して否定しているつもりはない。また、過ぎ去りし良き時代をひたすらなつかしんでいるわけでもない。田辺利用計画が正解だったか失敗だったか、女子大学の拡大政策が正しかったのか誤りだったのか、そんなことは現段階では判断できないし、おそらくその答は当分の間、いやひよっとすると未来永劫出ないかも知れない。結局のところ失敗だったという答が決定的な形で出るのは、不吉な言い方だが女子大学がつぶれたときだけだろう。ともかく、田辺利用という道を選び、それに従っていくつかの計画を進めてきたのだから、我々がやるべきことはこれを成功させるべく充分な手を打つこと、それしかあるまい。失われた時を嘆いてみたところで、ことは始まらないのである。

さてこうした中で、女子大学の英文科は一九九一年四月から全面的に田辺に移る。つまり一年次から四年次までの授業を田辺キャンパスで行なうことになるわけである。そしてこれを契機に英文科のカリキュラムを変更し、新たなスタートを切ろうということが現在学科内の最も大きなテーマとなっている。もちろん今の段階では、新カリキュラムの詳細も決定していないし、今後英文科内で様々の

議論がかわされるだろうから軽はずみなことは言えないが、とりあえずこのカリキュラム改訂作業に関わっている人間の一人として、なぜカリキュラム変更が必要なのか、またこれによっていかなる将来像を描き得るのかという点について、この場を借りて若干の私見を述べてみたい。

まず最初に、現在、同志社女子大学英文科には一学年平均約三五〇名の学生がいるという事実がある。四学年で一四〇〇名あまりが英文科の学生として在籍しているのは、日本全国を見渡しても、少なくとも数の上では有数のものと言えるだろう。そしてもし彼女たちすべてが、英文学なるものに多大の興味を示し、その研究に励むとしたら、いささか無気味な感じを持たざるを得ない。もちろん言うまでもなくそんなことはあり得ない話で、英文学が好きでたまらず、その研究に一生を捧げるなどという学生はほんの微々たるものである。教える側にしても、研究が好きだと言いつける人間は、必らずしも多くないのが現状であるが、それはさておくとして、英文科は英文学研究の専門家を養成するのが第一義的な存在理由ではなく、むしろ英文学（あるいは米文学、言語学）を通じて学生の教養を高めるといのが、これまでの英文科を支えてきた柱、ないしは看板板であった。シェイクスピアを読み、ミルトンに触れ、ハーディを研究することで、学生たちの知性、教養、ひいては徳性までもが磨かれるはずだというのが、長い伝統を誇る同志社女子大学英文科の存在理念だったのではあるまいか。そして英文学の作品を味読するためには、何と言つても原語で読むことが重要であり、したがって一、二年次では主として英語の読解力を養うことに重点を置き、

これを土台として三、四年次において『失業園』や『テス』を深く研究するというのが、ほぼ基本的な流れであった。

こうした枠組みは確かにそれなりの価値があり、伝統を重んずる英文科のカリキュラムとして一本の筋が通っているとは言えるだろう。けれども、このカリキュラムが果たして現実の状況に沿うものか、あるいは巷間かまびすしく叫ばれている進学人口激減期を迎えるにあたり、これに充分対処し得るものかという点と、必らずしも安閑とはしてられないというのが率直な感想である。

まず第一に学生の側の問題がある。同志社女子大学が全国でも有数の名門女子大として、すぐれた女子学生を厳選して入学させていた時代はいざ知らず。現在の同女は数多ある女子大学のワン・オブ・ゼムに過ぎない。もちろん関西以西の女子大学の中では知名度、学生のレヴェルの面で上位にあることは事実だろう。しかし全国規模で見れば、いささか言い方は悪いが並の上なのである。別に自分の勤めている大学を卑下している訳ではない。ただはつきりしておくべきだと思うのは、内部に在るものが考えているほど、あるいは期待するほど、世間の評価は甘くはないという点である。そして入学してくる学生たちは、別に英文学が好きで、あるいは英文学がどうしてもやりたくて入ってきたのではないということも、改めて確認しておくべきだろう。彼女たちの入学動機、受験動機は、英語が好きだから、英語がうまく話せるようになりたいから、一応名の通っている同女なら世間体もいから、レンガ造りの建物に憧れたからという程度なのである。英文学などほとんど知らないし、まして英語で小説を読むなどといったことは、別に望んでもいいないのだ。

何だか学生を軽べつしているように思えるかも知れないが、毛頭そんなつもりはない。少なくとも自分も同じような動機で大学へ入ったし、むしろこれが普通なのだと思うのである。我々教師は、つい自らの恥多き学生時代を忘れて、今どきの学生はなどと偉そうに言うものだが、五十歩百歩なのである。

せいぜい英語が好きだからという程度の気持ちで入学してきた学生たちに、では我々が提供し得るものは何か。まずは英語の能力を伸ばしてやることだろう。そのためには現行カリキュラムはあまりに専門的過ぎるし、英語を読む、書く、聞く、話すという、いわゆる四技能の育成がおろそかにされている、あるいは能率性に欠けるというのが、大きな問題点である。大学のカリキュラムには様々の、時として不合理とも思えるような制約が学内外から課せられており、また施設、教員、時間などの面で後退を余儀なくされることも多々あるが、何としても一貫した英語訓練のプログラムを作りあげること、これは新カリキュラム作成にあたってどうしても考慮しなければならぬポイントであろう。

第二に、英文科の専門教育の内容を再検討しなければならない。これまで英文科と言えば、英文学、米文学、言語学というのが専門教育の三本柱を成してきた。確かにそれぞれの学問が重要な意義を有し、明治以降幾多の業績をあげてきたことを否定するものでもない。また同志社の英文学がこれに多少とも寄与してきたことも、認めるにやぶさかではない。けれども今日、旧来の学問体系が徐々に変化を遂げ、学際研究という言葉が象徴するように、個々の学問の壁が取り払われて、より幅広い自由な研究が行なわれつつある中で、

果たして英文科のカリキュラムもこれまで通り旧態依然としたものでいいのか、やはり冷静に議論すべき時期に来ているのではないか。イギリスの小説を毎時間数ページずつ読んで、人生を語ることも全く無意味だとは言わない。好きな詩を朗々と詠じて悦に入ることにも決して悪くはない。卒業してのち、そうした講義をなつかしく思い出す人もいるだろう。けれども、それだけがすべてだというのはやはり片手落ちではないか。英文学を通じて人生の奥深さを知ることも必要だろう。と同時に、英文学を通してイギリス社会、歴史、文化を考えることもこれまた大事だろうし、もっぱら英語力を鍛えて実社会で役立つような技能を身につけることだって価値がある。

しかしながら、こうした点をカリキュラムという限られた枠組みの中で生かしていくためには、学生の側の問題以上に教える側が努力すべき点の方が多いかも知れない。カリキュラムを変えても意味がない、教える側が旧来のままではどうしようもないとも言われる。リベラル・アーツの理念を忘れてはならない、長年の伝統を崩すような暴挙は許せない、学生の意思にこびるような改革はすべきでない、といった批判もあちこちから聞かされた。今のままでどこが悪い、改革を強引に押し進めればあちこちにひずみが出てくるのが目に見えてはいないかという声もある。

このような批判、あるいは慎重論には大いに耳を傾け、聞くべき点は充分聞いて、できるだけ全員に納得してもらえよう。カリキュラムを作っていくことが大事だとは思ふ。けれども、ここで忘れてはならないことは、我々教える側が学問への情熱、研究への意欲を持たない限り、現行カリキュラムの下ではもちろんのこと、いか

なる改革を行なおうとも、未来は安泰とは言えない点である。大学の教師と何とかは三日やつたらやめられぬとは、まことに言いえて妙だろう。休みは多いし、仕事は手を抜くつもりになればいくらでも抜ける。一般企業の厳しさに比べれば、ずっと楽だし、働ける年数も長い。しかも社会的評価は高く、特に京都においては『先生、先生』とちやほやされる。これで気分が悪かるうはずがない。

もちろん人間誰しも、できるだけ気楽に世の中を過したいと思うものである。そしてそのためには長年住み慣れた土壌の中で、なるべく新しい試みはせず、論文や著書によつて自らの力を問うことなく暮らすのが、最善の方法だと言えるだろう。しかしながらもし、大多数の教員がこうした感覚で、それこそ『毎日が日曜日』のような生活を送るとしたら、おそらくは何の展望も開けることはあるまい。公平に見れば現段階では今出川よりもはるかに魅力に乏しい田辺という地に居を移し、多くの学生を教育していくのだというならば、やはり最も強く求められるべきは教える側の意識改革であろう。カリキュラムをどう変更しようとも人間が変わらなければ仕方がないというのも、確かに一面の真実をついている。それならば逆に、カリキュラムを変えることで教える側も変わるわけではないか。ことさらに悲観論を吐くつもりは毛頭ないが、現在の状態に甘んじ、前向きな姿勢を持たぬまま意味のない議論にふけり、会議を隠れ蓑にして研究時間の少なさを嘆き、人間教育という美名にすがりついて新たな学問研究への意欲をもたないのならば、結局は「歴史と伝統」という御題目のみが空しく音を立てる廃墟のみが残るだけかも知れないのである。

(女子大学英文科教授)

●進学人口の激減期にそなえて

アイデンティティを 確かめながら、発展を

中 島 和 子

(一) 第三の節目を迎えて思う

同志社女子大学は今年、設立四十周年を迎えた。一九四九年に新制大学として発足する以前の七十数年を合わせると、創立百十余年にもなる歴史の古い大学である。

この一世紀余りの間に、本学には三つの大きな節目がある。第一の節目というのは一八八五年（明治十八年）、主権問題をめぐって、「十八年事件」が起こった時である。この時、同志社女子部は危うく廃校の憂き目を見るところであったが、社員、教員、学生が一致協力して奮励努力し、経営についても、米国に頼らず、社員が責任をとるということで、廃校を免れたのであった。一旦、同志社を去った宣教師たちとの仲もやがて回復し、欧化思想の波に乗ったこともあって、其後、校運隆昌したと記されている。新島先生欧州旅行中、ミス・デントン来日前のことである。

第二の節目は一九四九年、第二次世界大戦後の学制改革の時であ

る。女子大学の前身、同志社女子専門学校は次の三つのいずれかに改革するよう要請を受けたと、E・L・ヒバード名誉教授の最近の著書『自叙伝』に書かれている。すなわち、(一)中学・高校レベルに下げる。(二)同志社大学と性格を異にするリベラル・アーツの四年生大学にする。(三)同志社大学の一部として吸収される。これに対して、当時の教授会は二番目を選んだ。こうして、キリスト教主義に基づくりベラル・アーツ・カレッジ、同志社女子大学が誕生したのであった。カリキュラムには、「聖書」や「人間関係」というユニークな科目が設置され、礼拝は毎日行なわれることになった。

また、課外でも、リトリート、キャンプ、プレイ・デイ、リーダーシップ・トレーニングなど学校行事を通して、人間教育が充実するよう配慮されていた。大学の規模が小さかったので、教職員、学生間に心の交流があり、絶えず対話しながら、学校運営がなされていた。学生も信頼に応えて、一所懸命に学校のあり方について考え、いろいろな活動に努力を惜しまなかった。

教育効果を上げるために、英語の授業は能力別学級で行なわれていた。課外には、デントン先生のタイプ一台からはじまったタイプ教室も設置されていて、これが短期大学のタイプの授業の基盤となった。最近、文部省から、教職課程改善のために必要だと通達があった科目の類似のものは、本学では開学以来設置されていた。教育の深刻な問題に直面して、はじめて、「人間教育」として何が必要なのかについて、世間が目覚めたものを、本学の先人達は早くから見抜いて実践していたのである。「人間関係」が廃止になった翌年くらいから、あちこちで、この種の科目、学科、学部が設けられるようになった。本学では学科別にL教育を行なうようになって二十余年になるが、田辺移転に際し、学科別には考える必要はないと主張する人たちも出てきた。しかし、今年になって、やはり文部省から、特に、学科別に情報処理やL教育（教育工学）を設置するよう通達があった。推薦入学制度も最初から導入されている。同志社女子大学の教育は古いようで新しい。外庄によらず、真の教育をめざして考えられてきたためであろう。改革の時には、学生数の増加によって無理をしている表面の現状だけを見ずに、原点に戻って再検討されるようにと願っている。

設立以来四十年の間に、女子大学は一学部から二学部へ改組、大学院設置、短期大学部新設、学芸学部・日本語日本文学科増設、田辺キャンパス開設などと、大きな変化を遂げて今日に至った。

そして今、第三の節目を迎えているのである。あと一年の移行期が過ぎれば、学芸学部（英文学科、音楽科、日本語日本文学科）と短期大学部（英米語科、日本語日本文学科）は田辺に、家政学部（家

政学科、食物学科―食物学専攻、管理栄養士専攻）は今出川にと、キャンパスは縦に二分されることになっている。まだ、それほどスケールの大きくない大学がキャンパスを二分し、全体の四分の三にあたる約三千人が、通学、通勤の便も今出川と比べればよくないし、伝統もなく、文化の香も未だ乏しい田辺へ移ることになるのである。そして、ゆかしい文化的環境に恵まれた今出川キャンパスには家政学部の千数百人のみが残ることになる。こういう状況の中で、やがて進学人口数の激減期がやって来るのである。このような第三の節目にあつて、二十一世紀をどう生きればよいのかを考えるのが私に与えられた主テーマであるが、今、考えをまとめることは非常に難しい。

新しくできた田辺キャンパスは広々していて、空気も澄み、四季折々に、どこからともなく、鳥や虫の声が聞こえてくるといふ、豊かな自然環境に恵まれたところである。朝早く登校すれば、静かに瞑想にふけることもできるし、建物内部の設備も整ってきつゝある。第三の節目に居合わせた者が選んだこの場所を併用して同志社女子大学は新しい世紀への歩みをはじめたところである。新鮮な気分で、未来を希望あるものに構築していくことができるようにと心から願っている。そのために、今、何が必要なのだろう。

現在、家政学部でも、英文学科でも、新しい時代に相応しいカリキュラムの改正に真剣に取り組んでいるところである。「同志社女子大学はどのような女性を輩出しようとしているのか」を問いながら、専門的な教育、研究の理想像と、立学の精神に基づいた人間像を追い求め、その二つが車の両輪としてうまく噛み合うようなカリキュ

ラムが作られることを望んでいる。

女性の輩出についてであるが、十年に亘る欧米の生活を経験して来られた新島先生が日本女性に期待されていたものは一体何であったのか具体的に書かれたものは余りないが、「夫は東を向くようにといえ、いつまでも東を向いているような女性はいやだ」といって、私と結婚しました」などと回想する八重夫人のことばの中に、先生の女性観が垣間見られる。先生は自立した、適確な判断の下せる女性を望んでおられたのではないかと思う。また、永眠される一カ月前の一八八九年十二月、今から丁度百年前に、女性に対して語られた、遺言ともいべきことばには、同志社が輩出しようとする女性への期待が込められているとも受取れる。すなわち、「……世の改革者と成られよ。否、世の改良者となりて働かれたし」。「世の改良者」ということばから浮んでくるのは、この世に迎合することなく、みことばに聴き、祈り、正しく判断し、真によきことのために、愛の心をもつて努力する、勇気のある女性像である。家庭における女性の重要な役割についてはいうまでもないが、最近、社会においても、女性の果す役割が非常に大きくなってきた。できるだけ専門性を生かしながら、責任のある立場で働くことができる女性が増えれば、それだけ大きく、新島先生の期待に応えることができることになるだろう。特に職業人の養成をめざす大学ではないが、新しいカリキュラムはこのことも考慮して作られることが望ましい。特に、大学院において専門的な研究を深めた女性には、一層の活躍が望まれるのである。

今、コンピュータを使えば、世界の文献の検索もわずかの時間

で簡単にできる。テレビ討論の方式を導入すれば、今出川キャンパスと田辺キャンパスで会議を同時に行ない、意見の交換をすることもできる。財政的に可能ならば、先端技術を導入し、人間の意識変革も伴って、新しい道を開拓していくことも必要であろう。世界各地から留学生を招き、同志社らしい国際交流センターの活動を活発にしたり、国内外の教授交換、学生その他大学での単位修得認可（学校間の交流）、最も身近かなこととしては、同志社各校の交流（教師、学生）の可能性を探ることなど新らしく考えられることは多々ある。

しかし、二十一世紀の教育をめざして、設備を整え、カリキュラムを改正し、教職員の充実を計っても、学生数が多過ぎては教育効果を上げることは難しい、神と人、人と人とのあたたかい心の交流のある教育こそ、同志社女子大学のめざすものなのである。教育環境を整えて教育効果を上げ、人格的にも豊かで、有能な学生を世に送り出すことができれば、己ずから、よりよい学生が多数入学を希望してくるであろう。同志社女子大学は以前から教員養成に比較的力量を入れてきた。日本各地で優れた卒業生が教員になっていけば、その影響を受けて、本学に入学希望する学生も多くなるであろう。

現在、田辺キャンパスに欠けているものは歴史の重みと伝統の香である。これに憧れて入学を希望してきた学生も少なくない。私学同志社女子大学に、「プラス・アルファ」の教育を求めてやってくる学生のためにも、私たちは先人の築かれた歴史と伝統のよき伝達者とならねばならないし、設備やキャンパス整備にも、そのために何かの配慮が必要である。

スコットランドのグラスゴー大学には五百数十年の歴史がある。

そのキャンパス内に設置されていた大学の歴史博物館が非常に印象深かった。今出川キャンパスにも、歴史資料・博物館を常設し、その分室的役割を果たすものを田辺キャンパスにも設けてはどうかと思う。ビデオやコンピュータなども大いに活用して、二十一世紀の若者の心に同志社の精神を豊かに伝えることができるよう、配慮されることを望んでいる。

(二) 歴史に学び、提言を

一九六七年九月から一年間、私は思いがけず、ブレイズデル・ボズビツシエル奨学金の第一回受領者として、カリフォルニアにあるクレアモント大学院に留学させていただいた。この奨学金は元、女專の宣教師であり、英会話などの先生であったミス・B・ボズビツシエルの遺産によって作られたものである。この遺産を、令弟、F・ボズビツシエル氏が彼女の同郷の親友、ミス・デントンの同志社への愛と功績を讀えて、「世界の文化と宗教」の研究と実践を誇るブレイズデル・インスティテュートに委託され、私たちへの奨学金となったものである。隣り町パサデイナにボズビツシエル氏を訪問した時、「私が死ねば、灰になってしまうので、是非お渡ししておきたい」といって一つの包みが手渡された。その中から出できた二つのものに、以来、私の心は促えられているのである。

その一つは、一九三二年にミス・ボズビツシエル宛に出された、当時女專の校長であった松田道先生の英語による長文の手紙であり、もう一つは、ミス・ボズビツシエルが中心となつて募金をして

下さった時の寄付者の名前を列挙した分厚いノートであつた。海を隔てたところで、半世紀も前に同志社のために捧げて下さった多くの方々の厚き祈りが心に伝わり、息づかいや鼓動までが聞こえてくるようだった。同志社設立の時や女子部の草創期をはじめとして、其後も、数々の建物建設などのために米国から多額の寄付をいただいたことも思い出して感謝と感動で胸が一杯になった。その時から、神と人との愛に支えられてきた同志社に生きることの深い意味を改めて考えるようになったのである。

松田先生の手紙は老朽化しているデントン・ハウスを建て替えるための募金の申し出に対する感謝の返信であつたが、中には一八八五年入学以来の凡そ半世紀にわたる同志社女子部の様子が回想風に詳しく綴られていた。訳註のために資料を漁っている間に、女子部学初代学長であつたヒバード先生の「自叙伝」を共同で翻訳しているうちに、次の半世紀の事情もかなり理解できるようになった。二人の女性の目を通して見たこの愛と祈りに包まれて育つた学校が二十一世紀に花を咲かせ、実を結ぶように、次の世代にバトン・タッチするのが私たちの責任なのである。「教育の大計は二百年にあり」といわれた創立者の心と思う。

さて、この募金を基にして作られたデントン・ハウスがデントン先生の献身的な活動の拠点となり、先生御生涯のお住居となつたのである。手紙には、「デントン先生の御宅でテーブルを囲む雰囲気は非常に国際的であることも興味深いことです。招かれた人々の間では、外国人であれ、日本人であれ、いつも誠実で善意に満ちた、生々

とした会話が交わされています」とあるが、あたたかい国際的な雰囲気、良心を手腕に運用しようとする人々の「喜びと感謝と祈り」に満ちた交流の場がキャンパス内に存在していたということに私は大きな意味を感じる。

新しく改訂される中学・高校の学習指導要領では、英語科のみならず、国語科、社会科などにおいても、国際理解、国際協調の精神の養成が重要視されている。同志社には国際学部はないが、開学以来、全学的に関心を寄せてきた問題である。この特色を生かし、二十一世紀に大いに活躍し、貢献できる洗練された国際人の養成に一層の努力が期待されるところである。

ここで一つ提言したいのは、デントン先生の愛と偉業に感謝して、今出川キャンパスの空いたところに（できればデントン館に）デントン・インステイ・テュートを設置してはどうかということである。女子大学の国際交流も充実してきているし、毎年、外国の大学院に留学する卒業生も後をたたない。その人たちの力も集め、世界各地からの留学生も招いて国際交流の生きた場を作り、外国人のための日本語日本文化研究会、卒業生やその子どものための外国語・外国文化研究会、児童英語教育研究会や幼児音楽教育研究会、生活・環境改善研究会などユニークな活動を行ない、女子大学の教育の活性化を側面から支えるものとしてはどうかと思うのである。

（女子大学教授）

キャンパスの年輪

—同志社今出川校地—



（増補改訂） B5判 二二二頁
一、五〇〇円（送料三〇〇円）

社史資料室長
河野仁昭著

百十余年の歴史を経た今出川キャンパスには国の重要文化財に指定された彰栄館・チャペルなどの五棟を始め多くの建物があるいは既に姿を消した建物があります。

これらの由緒ある建物に限らず石段・記念碑・樹木を中心に、普段余り意識されていない様なものも含めて、それぞれに纏わる話題を軽妙なタッチで書かれた文章に、新旧の写真・地図などを掲載した話題の豊富な美しい書物です。

また巻末には新島襄の足跡・田辺新キャンパス誕生の経緯なども収録し、校友・同窓は青春時代を、在学生は多くの先輩が残された業績をしのお格好の書としてご購入ください。

●購入ご希望の方は、左記へ直接電話または文書でお申込みください。

●代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金ください。

同志社収益事業課
京都市上京区今出川通烏丸東入る
電話（〇七五）一二五一—三〇三七・八